悠野集

雜下

土岐文庫
文庫17
W46
12

帝王　神武天皇
中宮　將軍
大隱在市朝　僧
老翁　老慈年
訪友　人之治
暮望旅客　關路行客
狩獵　獵師
樵夫　遊女
継母　乳母
李夫人　王昭君
陵園妾　楊貴妃

誓田天皇　足姫天皇
臣　刺史
淨侶　老
道心年老深　對鏡知身老
客　見行客
民　面
漁　漁父
傀儡　垂髮
子　孫
上陽人　青黛點眉々細長
長恨哥　老女
東宮
隱士
老人
對鏡悲老
暮望行客
高客
海人
親
まつらさよ姫
巫陽臺
尼

文庫 17
W46
12
昭和六十年二月一日
贈
寄
01018519496O

白居易　浦島子　折臂翁　仙人　もぬけ子
やせ老　き孫　病人　罪人　流人
佞人　盗人　立石人　心　雜心
人心不常　世路山何嶮　天可度　著駄政　乍隱見
幽思　曉幽思　幽思不窮　延思　淚
憂喜同淚　憂喜同夢　憂喜依人　遠情　寢覺遠情
遊興未央　遊山催興　哀傷　春哀傷　夏哀傷
秋哀傷　冬哀傷　歲暮哀傷　帝　御葬
御ものの母　親王　子　子二人　子孫
親　二親　妹　忍妻　丈
老人　僧　旅　とハ法師　蘇生

かき紙　おびる　多せなぐる　形見　形見乃書
繪　衣　鶴　牡丹　いのち免
なでしこ　菊　櫛　鏡　名　遺像
やまふしの母　とし弓　古墓　移ゝてとゝ　藤衣　墓
無常所　移ゝきこう　葬　七年　七日　三七日　四十九日
月前無常　寄風無常　無常　寄雨無常　月催無常
薄暮觀無常　寄水無常　寄露無常　朝觀無常　夕觀無常
寄無々無常　寄空無常　寄火無常　老後無常　夢中無常
深觀無常　無常觀身　無常念々至　諸行無常　觀無常
雜無常　煙　雲　空
霜　泡　藻　橋　柴

花　草　柳　落葉
琴　鐘　玉　舟　書
過衣帳　獸　虫　塵　旅

旅宿觀無常　伊勢齋宮　岩清水　加茂
任吉　春日社　大原野　布留　日吉宮
三輪　今宮　稲荷　玉津島　気比社
蚶方神　左園社　賀舟　祇園　朝熊
産宮　蟻通　駿河富士宮　松尾　國常立尊
月読尊　鸕鷀草葺不合尊　天兒屋根尊　猿田彦　下照姫
玉依姫　社　社頭　社頭月　社頭夕
社頭杉　社頭榊　社頭祈　祈雨　祈晴

社頭述懐　社頭夜　社頭久　社頭祝世　社頭祝君
神祇　春神祇　冬神祇　寄日神祇　寄月神祇
寄花神祇　寄榊神祇　寄注連神祇　寄鏡神祇　祈あそび
賀　慶賀　衆人慶賀　祝言
寄天祝　寄日祝　月前祝　寄月祝　寄雲祝
寄雨祝　寄風祝　春祝　夏祝　秋祝
冬祝　寄歳祝　寄山祝　寄道祝
寄道祝言　寄水祝　寄地祝　寄巖祝　寄都祝
寄國祝　寄郡祝　寄海祝　寄竹祝
寄椿祝　寄杉祝　山家祝言　寄松祝
久祝君　爲君祈世　寄苔祝　寄鶴祝　寄亀祝
寄世祝　寄氏祝　祝両人

寄鏡祝　寄別祝　寄社祝

雜祝　沙　笛　琴　寄神祝　寄神祇祝

碁　舟　草　柳　柿蔕　脇息

稲　名所　杣　麝　薪

駒　夜　滝　衣　産屋　貝

孫　七夜　五十日いわい　ぞめぎ　元服

年賀　四十　五十　六十　七十

八十　九十　杖　老後祝　治國栽松

雜天象　寄天象雜　雜地儀　雜動物　寄風雜

雜夕　寄山雜　寄水雜　寄橋雜　寄海雜

寄川雜　寄木雜　寄苔雜　寄衣雜　寄枕雜

寄舟雜　寄玉雜　寄鐘雜

雜香　寄花雜　雜色　雜聲

拾璧集巻之十二

雑之歌下

帝王

神武天皇

誉田天皇

足姫天皇

東宮

万　大君は神にしませば天雲のいかづちの上にいほりせすかも　人麻呂

同　ひさかたのあめゆく月をあみにさし我大きみは蓋になせり　同

同　あめなるや月日のごとく我思へる君が日にけに老らくをしも　よみ人しらず

古　あめことにうらべる舟の君なれやそこにとまらぬいふすそ世を　伊勢

勅　君すめるみくにます時に逢ひて心の丈を世に知らるかな　西行

代　さだめなきそ照す月日のゆらぎなき君がぞあふぐいやたかの山　頼光

新　白波にむかふうみのうしろには清見がひのとまりなるらん　千古

代　久方のあまそゝる山へけるしるしを君がなかにうけてそあれず　右大臣

万　たらし姫神のみことのあゆつるとみたゝしせりし石を誰見き　憶良

古　峰たかきかすがの山にいづる日はくもる時なくてらすべらなり　因香

同　つくばねのこのもとごとに立ちぞよる春のみやまの陰をこひつゝ　清樹

後拾　光いづるあふひのかげを見てしかば年へにけるもうれしかりけり　選子内

早稲田大学図書

中宮

三公

將軍

醫

刺史

隱士

ナ隱在朝市

僧

月 宣保
古 いと
後拾遺 紀伊
物 後京極
宇 ちくはく
同 元四年
同 出ヶ口
物 鑑倉右
家 橘宿禰
同 八東
同 家物
同 ちくはく
後 家物
同 宣旨
同 醫房
同 光優ハ

述懐 老

新勅　なきつくる身にもおもひのなきものをいかにせよとてとし月の年　宗安

同　松のはに岩ねの若にすむ波の袖のかはきもせぬ心地する　同

續　ますかゞみふりてぞ世にもへにけるとそちらも見えぬ時にぞ誰も　元輔

万　かぞへてもしきなれどとし月はあらたまれども人はふりゆく　よみ人

古　今年振らもの橋もあれぞ身とへぞふしのくねれぞ　同

同　世の中にふりぬる物は津の国のながらの橋と我となりけり　同

後拾　老の波よせじと人もいとはぬに待らん物かはうらのよにも　連敏

金　年ふればかしらにつもる雪まおもくきえせぬ菓のことをしるかな　仲実

新　うきながら久しくぞ世をすぐしけるわかれしわれにえられし　信実

同　大空にめぐる月日の速けしはあすもわれにのこるせなり　慈覚

同　ながらへて猶君が代を松山のまつとせしまに年ぞへにける　さぬき

代　いたづらに我身もふりぬ高砂の尾の上に立てる松ひとりかは　能因

同　高砂の松もひさしく誰ならで是ぞ知人ありせん　忠定

同　いたづらに老ぬる後ぞ背せしつらくもあらまし人をこそ思へ　定長

老人

同　ふりはつる背はすくなく成ぞまさるなき身をいかにせん年　三位

万　旅人はあかしさらしたびひとはすゝむるぞこれよりしるべき　よみ人

古　白雪のやへふりしけるかへる山かへるがへるも老にけるかな　棟梁

後　年ふればわが黒髪も白川のみづはくむまで老にけるかな　檜垣嫗

後拾　春くれど消せぬ物は年をへてかしらにつもる雪にぞありける　花山院

新　見し人はなきにかずそふ世の中にいつまでとてかわが身のこらん　能因

六　からくして山田のいほをなぞへつゝおくのとしをつもるにぞ　みつね

老翁

代　うき身をぞ恨むる人もあまた有るを我のこるらんとふらん　伊勢

同　そのかみの老にかはらぬ身のほどを思ふ老の波かな　忠家

後　あるかぎり君が代にてく年ふりて残る月に影ふけり　後京極

拾　いまさらにさびしき人はおとろへし昔の秋とぞなげくらん　行宗

新　いにしへのわすられぬ吉野山やまもさびしき齢ある人　元輔

新　八十あまり西の迎をまちかねて住むる世の庵ぞ　兼日

新　難波がた蘆まの氷ふりねがはくは我身ぞへきねふしの身や　俊成

老述年

道心年老深

初 まいまづる日の松かぶのもとをたのもしかれ人やうしぐき　入る雲
六 世をとてとてくる箱枕つきてとれのあてるるるよしぶ　ちみ人
同 くひがしの山をとられば萬ぐの金ぬりする人ぞ仕る　奥之
代 ひぐさかをやよぐうと紅ふるんをとれ箱ふ分をばゆづりて　清輔
同 ふるあつをもちいかうとふるあぐら世ぐの山松ぬれみそぐひく　芳文政
同 白髪をよそふおてうそみつるぶ家分ふたる秋をしぐて　反俗
古 かぞこれぐとまるぬ松やしといひををいてく老ぞふ　後人知
同 おいくのうんと老せぐ門さしてあとところてあんざらまを　同
同 ゐてるる雑波のみつふ焼塩の叩くしてれい老ふるるか　同
野 老らくす月日いとぐ不せ川ぐるね波ふぬる牡ふ　光輝
代 あくそちぬるきるつぶふ紅きしきふと歳ぐとそ世ぬ老らん　秘蜜
同 すぐして年ぬ歳ぐとぐそれぐゆぐいと新く老ふるれ　忍子
同 このえふぐよく月の歳そて安ぬる分こそ世ぐるそ也　丹後
同 くるるいさうゆきこえて清ふ祐長くいるふるひ入しる　左大下

對鏡知身老

對鏡悲老

訪友

人を待

客

見行客

暮望行客

初 ますぐみそこれる新ふ年ひるそるるとぬふ祐しるね　莫ふ
六 ちきおりわくこるちすぬ　せどうう
金 くそを紅かぐみの新とそそるふ老そのもそれ題をする　呼吸
代 紅ぐとふあれをいとぐます後しるね菊ぬいつまでうん　貧僧
古 老ぬをひちきるれ涙ふ焼ぐぶの弱ぐるれぐぞそとぐふ　忠房
同 沖つ波るしの涙のそま松の名ふそ老ぬ結くそつま　長之
同 いまぞしるるすき拍とくまるん里ぐいんずとふ紅ぐるそ　業平
同 紅とあるぐ鶯と新そて年をくんうれぐ必ぬ君いぐるん　ちみ人
第 松ぐぐのきよ紅涙ふ初ぐぐ老きまさんる清きそますぐり　八宋
後拾 ぐすぐるおちぬ中ふ小る袖の秋ふ行せつ安新るる年　後人知
初 いつとあきふぐのふぐ紅みてられねとくのいぐぐるれ　左金
続 樽ぐるる紅の菊れそるんぐ紅りくの袖ぐ新るき　紅雪
後拾 菊のやれこの涙ふ日ぬられぬぐちりくん駒ふ行せて　紅国
続 夕日さす滅ぐぐての紅くそれぐぐ新るるくん　秘伝

詞

開路行客　　塩川右
民　　園六呂
西　　とみ人
商客　　國茂
狩獵　　恵秀△
獵師　　清人
漁父　　額田女王
海人　　清人△
　　赤人
　　槻本
　　忠岑
　　少部
　　赤人

國こゆる人かとぞ塩屋のあぐちのまゆみ紅葉しぬきて
みやこびがいくる市をわがつちのさゆる時かあてくるだ
ひらの山つくるみちぞずをちぐかふくよるかとるぐ
夏つくるひぐさたくみがてをの言ひとくくるめ代とみしれ
まぐきする船ぶのくくみぐろかまおとあおうかまみそ
西の市かくでひとり出そめあるぞずくるきぬのわまこ
あるさす紫地ゆきをゆま地きいえずや者が袖ふる
氏づくりをかをはなてれ物かをへちいねぐれの型か
義ふるゑ野のうちかみ立てはまのひぐれ出ぬ年か
見しらの山かて地かてうちらうくさみ出ちぐるこゆ
さくるのひらう岡の海くをぬ紡するあまの袖くるみゆ
塩のまかあさらする海ちてものぐくいをとと社ぐぐ
ちるの雲ハやうら塩やきいとまあこゆするれと梯ちりみ
和ぐかるぐれとゆゆみちる國ぬまの雲の舟かうくく

雄支

雲をとも棚あしを舟こぐ漁のやどうかうれ出きこゆ　金村
うづつの河つ白波をらくく海士をとめ先急ぐこ経　こ海人
ぐれとぞちのかすあるる雲をとも沖つもうかを舟出すら　田
見やうの名かをあるるとのうづかかるとと雲をとも先　秋麻
いせの海かを海を見どくるみるいうづこのぐうら代　い世
世の中いくてもへくりきさぐこの雲の苦をを家岩かて　能因△
舟れ中波のうかをぐ者かるる海ちのうぐていとまかの　橘政
萬のやれあぐれ塩やきいとまあこれのを振さうぐさ　業平
白波をちくく海士ぐ舟と命かくるえるめうかう　無風
わくれ出とハれど袖ごとか光れえね雲かぞをる　伊勢
雲をとも塩やきめうれ浦かつぐのを振さ言ま　後鳥羽院
ものくるいくぐ雲のあまか舟れくの塩かとも　京極△
あぐさこるれハうあぐうすぐせう浦世の中かいくるる年　赤染
ぐれ物地かをるる氏の言ぬくうれ風れ意さ　ちうこ

遊女　偃偏　垂髮　親

慈母

野　独り（ケイ）のと云て世の人に捨てうとみ
同　ちり波のよする浦ふかき世に老て身をあまたまれば若と定めず　為忠
代　あれある分のあるひ小島に捨て
後　いでこそ人の宮ぬ拾へ分と云ふ人のなげき者とするよ　拾遺集
古　うよろぎの波立ちの中さまあくまれ波　後人
万　あ〳〵世でと思ふ〳〵ぞ世のすぎぬ　小黒栖
同　時の花いさとと何のすぎぬ　真ヶ呂
同　父母と苦ふとぐ〳〵や茅枕　黒當
同　まなぐらにて紙れるやのごといませ母とぢ　首ヶ呂
後　人の祝のんなくふれるとてそ　菖蒲
拾　人とあく物のちぶさ紙ふ　とりの母
詞　木ぬ中ふきあつまるこ　義國妻
代　ふなで一枚の美ふみしらず　駿民
金　信濃なるその系は社あるとて我たくきまと今は　西行

乳母

後拾　とあくしこもるふちとあくてはあの母のとせんとは　道綱
同　さまあらばれやまとんし思ふ　東俊
新　長とそなでこ立一立ちくは世ふそもむ　行平
万　ねるとそ立ちばねむ何せんと培れる　情氏
古　世ぬ中ふさるねふのあくとぶちよとあるこ人のまたらめ　業平
同　七文は何おひ出ん何のまろうきうちぶ世とりうずみる
後　あるこはいるまとあく自どもくれそ咲は長せろう　太政
拾　ものぶふるふ思れぬ時は程うあくれぬ　贈皇后宮
同　若何の家よはとふ林ぬとしねは殺せば　朱雀院
後拾　ものあるきふ合はあるこれ紙さく平あると云だ　花山院
同　基ごとのは日は京く色つまどいるふ家の松はみどらき　出羽弁
同　義等生小蓋よ名れた古仁の松はこるく春よるふ　内大臣
金　分ふ塔る拾ふうるるみどりるはやうんまあく紙ふれど　ちみ人
詞　るれつる物の因ふこあるれて子ふ春ふて塔あるふ　宮内卿

孫

まつらさよ姫

李文人

王昭君

紫山堂

嶮岳堂

赤濱

夏子堂

定之母

[illegible]人

[illegible]方

赤濱

情壽

情壽

秋葉

[illegible]

唐玄

上陽人

青黛點眉く細長

巫陽臺

陵園妾

楊貴妃

長恨哥

老女

尼

雅光

[illegible]

光行

雲蓮

[illegible]方

光[illegible]

[illegible]

高遠

[illegible]

[illegible]人

白居易
浦島子
折臂翁
仙人
たはれ子
やせとめ
きつね

古 難波がたうらむべきまもおもほえずいづこをみつのあまとかはなる　よみ人

後 音にきく松がうら島けふぞみるうべ心あるあまはすみけり　そせい法師

新 なれみてし花のたもとをうちかへし法の衣をたちぞかへつる　法性寺入道

同 そのかみの玉のかざしをうちかへし今は衣のうらをたのまん　東三条院

同 うきまゝん衣のうらはさすらふる浪やうらの玉にまがへん　枇杷皇太

後拾 いそぢつゝこれぞきらめる山里にいつまですめる秋の月ぞも　嵩経

十 百千度うら島が子はかへるとも此のあとこそはみべし　俊宗

月 ひぢはかりんとさてね抱かもうらぬがらもいくつまではやは　能宣

方 けさうしにまたもゆるえ衣ありふぎかれこね山にすむ人　読人

後拾 老秋ふして年ふる我身にてまつと鶴との年はへて　範基

新 ちる妹にあらねとおもの山里は絶人さへや雨がもらせね　元方

秒 しぐれぎにたちあかし深の衣さえ紅葉にまずる人やたちこ　経因

拾 踏みきらふ我すがのやせとめの神と祈しとものぎらわかや　たいき

同 足引の山のさそまのたとおかるがに菜ゆる神のきつねに　輔

病人
罪人
流人
流人
舟人
盗人
もろ人
心

万 春の花いまは盛りになりぬらんわすれぞゆかんたちよりてとがれ　家持

後拾 稀ねかめのふりきはどの緑まつとひかるぞすでにひとりかれ　赤染

同 おきてるねずとともに杖つきし名れ春ゆてわしきてあくや

拾 足そく宮の山ぞいは出けどもしとみるにぞ身はなげつる　よみ人

代 これぞこのあかつきつゝあれどみてはゆくさき抱にたえぬる　定嗣

後 おさせ川まつる瀬さへやかはるらんよにたえぐまま我身とおもへば　讀人

千 さりとは敢えていづくたのめなん身は海の波にあづまね　入道

新 さすらふる身は定めたる方もなしうきたる舟の波にまかせて　良暹

六 流れゆく我をしらへで大ぐこの海をかるにも恨つえせず　よみ人

万 あら山のそがしのかさおなたねもさくにも稲かる人の　紀文

拾 ぬすびとの立田の山に入にけり同じかざしの名にやけがれん　為教

古 世の中はいかにくるしと思ふらんこゝらの人にうらみらるれば　元方

同 身はすてつ心をだにもはふらさじつひにはいかがなるとしるべく　興風

同 白雲のとてに我身はならねどもあまねくも心をぞかる　千里

雜心

人心不常

後拾　うつれかはる菓白は京よ宿れども心がはりはかへらざりける　入道前

千　うつりゆくうき世のはなに人ぞ人のあるべき　基俊

六　つくづくと思へば安き世の中を心と嘆く我身なりけり　長延

新　心こそ心はかるかれのおもひしかなり　よみ人

六　世はすつる心を物ぞあはれなりけるうき世とは思ひしれども　道宗

代　うきはかまことひねる時は哀をおもひかねてあくがるゝ心ち秋すれ　実之

同　うきとうるはかのこゝろを静にて哀心のいとまなきかな　覚超

同　心はぞなきぞあれぞとうきものとおもふすぎうらよ　兼覚

古　あはくも思ひあたるさまかれ秋山の月もみえなくなり　小町

同　桜花とく散ねなどおもふこそえずは人の心ぞ風もしるね　貫之

同　いづくにかよをのがれんとそもたかきにまどはれこゝろそ世いへ　素性

後　世はすてゝ山に入人山にても猶うき時はいづちゆくらん　よみ人

拾　人ごとにとかれそれぞ白露の消るまで猶えしもうらなき　頃

　　見ぬ事に人の心にふれてもうきことは花のみぞ　まつ

世路山何嶮

天可度

著駄既

乍隠見

慮思

同　春秋におもひみだれて分かねつ時にのみて移る心は　貫之

續拾　大かたの秋にもよせしかど身みるときいつの世ぞあし　同

同　秋はすぎ春は前は岩あぐらぞるゝ人の心なりけり　よみ人

新　ひとりのみ思ひ宿すし心にも物そむるき身をいふらせん　前大僧正

代　いふせんつきすのみて数多てよし世の実も使ふらると　左京大夫

新　みつづらの塩なれそるみなぐし人の心ぞ定らぬにきたり　良経

代　いかくもとのつこまにそのかのはなのよしは世のふぶて辨せ　為家

後　思ひよをこそすあはし月影はまさに山の宗に入かしに身ん　よみ人

續　秋さそのつ宿にまよふる歌を遊て見えかくれぬる身は月に　小大君

千　身はかくれはぎらすせ人やおもてくらにあがら身ぞねまで　家長

同　うしとそもいとひてもぬ世は世中と何に思ひしぞきん　丹後

新　世はいとふ人の深くある事まに色る月見はおもひぞつゝ　慈鎮

同　あがるていかるはいふにもどりうきにし身の程はよそに　師光

　　ござる

暁幽思

幽思不窮

新　ちるなみのひくにまかせてもさそはいかにはかなきおもひなりけり　あり

同　なさけなし昔は袖思ひかれてなかくへまうき世にやふるらん　同

同　数ならぬ身を何ゆゑにうらみんとそれくてくるしなるを　行尊

代　都にてうしとそ山に入しかとそなたにむかへ見はらくやすかれ　行命

同　うき世そと思ひすつれと命社さすかにおしき物にはありける　為家

同　行末をたのむすかたにこそはしるらめいつまてさそとはおもふ身あはれなれと　和泉式部

勅　うしと思ふ我身の秋にあらはなと萬につけて物そかなしき　覚寛

秋　身はうきを思ひつゝぬる暁にあくらん露のなとはしらぬ　道房

同　まとろまて物思ふ君のなかき夜はあけの中にきかれし　よみ人

古　身と思ふ物かしわかれて年月を長あなかうと思ひつる　貫之

遺　長かれとおもふにはあらねともいのちそえ社ありけれ物を　読人

同　思ひあまるかはしらす身とそきくはいまとひの音にやなかれん　いせ

拾　なき人もあるかうきを思ふにもいかにかられぬは浪せなら

千　いつくにか身をおくさましいとひ出て浮世中をなきに山あらは　為義

同　なほさそいとひし世はうきまゝとられぬと思ひそ長せん　道覚

新　いとふへき世にあらむ社世のなかを捨てあはれはなしと又おもひそめ　あり

同　何ことにとまりなんはなけれともさらにしても世のいとふへき　同

同　暮あかつらんはそをたのまぬかれすてられぬ世はいとゝ惜しき　摂政

勅　あふくしも袖を思ふをたつぬまゝにたのますぬれつゝも覚えまし　同

同　此方の海を祝の浦につくすたもと思ふことなれと　俊家

同　又すくしも世をおもはさりけれてもなかなか時のまも身とは成し　和泉式部

同　いかにせんあはれはこそ悲しけれ花の袖のまゝ露ぬれつゝ　同

代　思ふにもとられぬねよとは知なから我なからある身をいかにせん　相模

同　我そうきともちよふ人やありとわるとめしも身とてしかれ　西行

同　世の中を思ふしくるし思へと思ふたえにも見せん　本院侍従

同　後の世をとくそおもひ入るあつさは身社あかしけれ　能信

同　それなりそ物思ふ人をうきの中に又あるらんとみるそ悲しき　永縁

同　とてかくも我身ひとつはなしつゝ誰かれ名社うしろめたさ　為命

延思

代 あづまこそうに分のくせかぬそてくだくあねをてせるはあり。 新蓮。
明 数をねぬ分いあきはかなりそつ袖ふかの八世代と恨ん 西行。
同 いづかれ侘ずいらでもまだわらん苔の底のまぢ世代 俊宗
同 り東八家をて思ぶ人やあらん苔をらふくろうらひか
同 分代ををらひくぶもくみあまもくそむく者ひもきせ ふり。
同 あるもの代いさり抱をつれくと袖るをぶかとくとあ 和泉式部
同 うきあづら抱をまる金れ後代世とそと敷あるれど 師光
同 さをたと敷是ムより東ひ見ぬ世ふまう後らん 季保
金 消まもや後ふうぶ家分られんぶうくえ見をざをを
六 長とうとうとうを山笑をるる後ふ袖のしまうん 上紙
千 長させかうれきせふと先ふうろ後をもあぶ後せうう 貴之
代 世代ふかるぶそあぶかある抱をうれきふを長る後の 歌方
千 見や美いづ世う現をあきををうぶれぬきうれ 見為
代 ふうぶれあぶくとなぶふいをあどういとくんあうん 参議
 承觀。

遠情

寝覚遠情
越興未央
遠山催興
哀傷

明 花あるぶで栄代とぶさくをふのあくとみうり世代山 長家。
代 うもしちうさまう抱ぶ山里代花見ふさをを人の春きれ 四条太后
明 ぶりやるかどのをあるきふ山せい袖長をくしぶ婦るふ 九条右
明 後の世ぶふくしせくとそうくかくくつきまくいしれを 中納言
明 ちぶるる人をるるや抱世くと袖代用ををふ見るをを 邑陶
明 り東ハうきふ和ふ行ぶ代背いをを人あるうん 下野
子 ふる分の板るぶ風ろね見くて春のあくをふいこをを世 完教
古 ぶふどちまとるせるよい春涙くをまくをき抱ふぶ見る 俊教
代 春ハをれ秋ハすみぶとかぶやをれよりのふぶよ春さををうん 人麿
第 あすの川ちぶふみうくせるませぶ流をあくしぶどふる 結人
明 寝つ春くくの世ちをのくれをのをれくいをふ見ぬ 丹生王
明 石とふるれくふる板村のふいふぶき春あうあくり 筆
古 あくかうぶあくをくをんうをを川ふ場ふるぶ場ふるぶ
明 袖をせるぶ測とあうをれ涙ふうをとむるをぶふみぶ 宝ふ

古 あすしらぬ我身と思へど暮ぬまの今日ハ人社悲しかりけれ　貫之
同 ちの涙落てぞたぎつ白河ハ君が代迄の名にこそありけれ　そせい△
同 さきだゝぬくいのやちたび悲しきハ流るゝ水の帰りこぬなり　閑院
後 おくれてもなくられぬ身なれどもとまるバかりを悲しとぞしる　い世
同 人のよの思ひにかなふ物ならバ我身ハ君におくれましやハ　三条右
拾 忘られてしばしまどろむ程もがないつかハ君を夢ならで見ん　中務
同 うきながら消せぬ物ハ身なりけりうらやましきハ水の泡かな　同
同 草枕人ハたれとかいひ置しつひのすみかハ野山とぞみる　順
同 皆人の命を露にたとふるハ草むらごとにおかんとせしなり　すゝきよ
同 うき世にハ今ハあらじと歎てもみぐるしきこそ哀なりけれ　能宣
同 世の中にあらましかばと思ふ人なきが多くも成にけるかな　為頼
同 常ならぬよハうき身こそ悲しけれ其数にだにいらじと思へバ　公任
同 かくてわらぬ浮世にすみぞめの衣の袖のぬれぬ日ぞなき　よみ人
後拾 墨染にわかるゝ衣ぞなきさぞ涙の色ハかハらざるらん　輔親
同 とゝまる人なくなどそなげかん(ぬらすイ)残る身にあればハ見よに　中宮内侍
同 さきたつ涙を見ても我こそハ先りていなまほしけれ　よみ人
拾 菱なくて又も逢見ましき君ならバ惜まれぬいのちも歎かざらまし　和泉
同 悔しくもみえあはざるかなかくてよの哀とそらさてきこゆまし　四条中宮
同 夕まぐれしげき庭を詠めても残の菊と庭におつる涙か　義孝
千 大かたにさびしきねぬる月影ハ涙むすばぬ人にみせばや　女房
同 おくれじと思ひしかねど我身ひとりの残りけるかな　範命△
同 なきとみし人ハ程なく我も又家身も風を待としられん　通房
同 口おしの花の色にも家身入水らん思ふことのゝいくぞもみねる　為信
新拾 抱きの思ひぞ○君の枕よハ涙かぶらねあさぞなき　信明
同 世の中ハみしもたのしもいられくて無しき宿の煙なりけり　清輔
同 うき世にハしとはかたの山風にこれやかぎりの命なりなん　俊宗
同 古里にふる涙やひとつらり夜すがら空の露乞のつゆ　慈円△
同 跡とめん涙のいろに世をすさみ○ね思ひハいつまでかあるべき　忠雅

新 われ君いかなる世々の契にてむかしきさの空と成らん　弁乳母

同 恋しく君をみえて煙にまがひし空も立おくれぬる君のなみだを　従三位

同 夢とみし露とも見らぬかはれて泣にし人を偲ぶこそ[illegible]　[illegible]

同 来て世にたえぬとみては[illegible]哀と斗いひそ[illegible]ねる　兼房

拾 恋しくて夢か現かと見し[illegible]てなかき[illegible]にかなしくこころを　後徳大寺

同 おくれゐて泣かね合はかうしみ[illegible]哀なりし世[illegible]　能蓮

同 きのふまで見し人の今日なきはかの空とぞ棚引ける　実方

同 いかにせんかの世の末法の[illegible]まる露ぶかまず　基俊

六 うつれどもいかなるかさをしたる袖を忘るるのみこそ[illegible]られ　実方

同 よをあかなき世[illegible]なる[illegible]を[illegible]して[illegible]ばたまにぬきかん　いせ

同 立しこそまさらにまさる人の身にいかに[illegible]る涙[illegible]　同

続 紅日さす[illegible]つゆの[illegible]るままにみし[illegible]ならば[illegible]　赤染

同 [illegible]れてこ[illegible]き袖を[illegible]の[illegible]さ[illegible]なるかな　[illegible]女[illegible]

哀傷

同 忘れじよしせまでと思ふべき身なれど先にさきだつ人ぞかなしき　為保

月 かくばかりあくがるる心よに砕けるつらき思ひけるかな　伊綱

代 世の中をそむきしかども[illegible]ひける君にて[illegible]れ　崇山院

同 結びおきし[illegible]きえていかにおもひて[illegible]別に[illegible]　木綿四手

同 よの中を捨ぬ身ともいひそめし[illegible]て見[illegible]まし　為兼

同 なき人を夢とていかにあらじ[illegible]てみつ[illegible]あらじ[illegible]　伊長

古 なぞもかくみなとは人も[illegible]にまかせ[illegible]を[illegible]まらん　増基

同 涙川[illegible]の[illegible]わたらへそ[illegible]はずに[illegible]のさけ　みなもと

後 [illegible]かは人こそあらぬ[illegible]いつまでさそ[illegible]ひとかし　もちゆき

同 いつかはいつやられかんあくてうきことの[illegible]ながらは　三条右大臣

同 あく[illegible]年の夜半[illegible]かなしき[illegible]かすかに[illegible]　基輔

拾 桜花のどかなる[illegible]人をこふる涙ぞ先におちける　法性寺

同 さくら[illegible]袖から[illegible]このめよ[illegible]ふるべし　ちかの

後拾 いかにしての[illegible]の君がよよつきこそぬるを見るぞかなしき　小侍従命婦

後拾遺 ［illegible］

野 ［illegible］

同 ［illegible］

同 ［illegible］

同 ［illegible］

同 ［illegible］

同 ［illegible］

月 ［illegible］

同 ［illegible］

代 ［illegible］

同 ［illegible］

同 ［illegible］

同 ［illegible］

後拾遺 ［illegible］

千 ［illegible］

同 ［illegible］

同 ［illegible］

同 ［illegible］

同 ［illegible］

同 ［illegible］

野 ［illegible］

同 ［illegible］

さこゑ

花山院

惟方

宋記

道輔

後徳大寺

定房

奥宮

久任

国信

伊勢中宮

上総

季通

奥宮

夏哀傷

同 ［illegible］

万 ［illegible］

古 ［illegible］

拾 ［illegible］

同 ［illegible］

後拾遺 ［illegible］

千 ［illegible］

同 ［illegible］

同 ［illegible］

同 ［illegible］

同 ［illegible］

同 ［illegible］

同 ［illegible］

同 ［illegible］

みな

大伴

後人

いせ

右大臣

上東門院

同

鳥羽院

安乳母

紀侍従

後出

国信

小大将

宮式ア

古 時しもわれ秋やまひとのうらぶれきりぎりすの声
後 色わるる人と秋しもとうつるふ紅葉の葉ふこえかな 戒仙
同 かりがねふきぬ音ゝ秋の葉だにうかりらん袖とぞいひしをる 玄上女
後拾 えんといひしひとをもうらぶれく清みし色袖つゆ秋ぞ愛方
千 紅葉ふ葉ぞ色ぞ秋ぞ袖と人ふもとくる秋ぞ紅葉 雅家
同 ぬしもやれもぬ山ふ葉ぞ清の紅ふつゆ紅秋のうら紅を 通清
新 命あるとばそこの秋ぞ月ぞうつるし人ふ色紅あきふ 経国
同 袖ぞとぞ葉あきぞ風しあるとうら分ふ葉秋の白雲ひう 久家太政
同 紅ふあきこ秋の夕べはちれうう清しあきぞ葉ぞうう 女房
同 紅葉深のそでぞ色ふあきうとあくふ色ぞうとあくす葉ぞこかな 貞平
同 紅ぞうれ葉の紅ふ葉ぞうつるく袖しぐる秋のふさと 弘輔
同 袖ぞうしこ秋のうら袖のうきるくす紅ふるうとふねとくあくうん 後徳大寺
新 紅ぞの葉紅ぞ分ぞ色紅ぞうう色清ふるうるこぞ紅きう 定保
古 袖ぞ月しうれふねうきみぢ葉ふうるくびこの袖うらうう 元真

拾 ゆみぢ葉色ぞ色ぞ袖ぞうん袖ぞ月しうるこぞふ葉ぞ色ぞ 円 宮光
円 袖の平ふうるぞうれきこ白雲のうふ清ねる袖とふく 内大臣
新 白ふうう紅ふううろひねこぞ色ぞふねふ袖のしぐれう 治部卿
強 ううきえてうれきよとふ紅ぞうう紅ぞうるる葉ぞ家分ぞうん 周防内侍
代 いちやうんこのぶふぞふぞうう紅ぞうるる葉ぞ家分ぞうん 藤原輔
後 あきこ人のとれふしうるる年ううぞられうふふられうう 曽禰
円 こうるまふうう色ぞられふふぞいとぞ色ぞ色ぞん 宣旨
千 夢袖のさすぶふうきこうふ遠ざううん葉ぞふうう 長家
円 雲ふううと時ふう袖の紅ふふこうとふ恨とふぞ 円
新 雲ふううと時ふう袖の紅ふふこうとふ恨とふぞ 家持
方 大律紅葉ふ色ふゆぎおいて宮代よあうふうふいぞふうん 三条右
後 人のよう色ふうふうふ袖ううぞ家分ふ葉ふ色ふれまうん り成
後拾 ちうれぞと葉のふゆきふいうぞ袖ふううぞ袖のうきう 赤染
円 袖ふるる色ぞのうう紅ふ紅ふうん袖と袖ふうぞ葉うきう

御葬

高倉の宮

親王

子

子二人

子孫

親

続
代 ちりもの〇さとまさとて家をてまもりしるかかる命ちやだ 新脱△
円 やうちなのあるうん浪の中さ立ちりまちしれぞ恋ひき 為家
金 ゑとてハまづうちも〇をみし袖とゑゑハ涙ふうあそんとすん 宗尚
宗 むうて家うゑぶよちうてす恋ざうてこ秋ゑぶうあきこ身とをれん ちみ人
さて波のちぶうれまうぶまう波れ浪せのををとれいさぶぶと ハまろ
円 しよりハ秋ぞ恋く吹ん世いぞうひとを恋きこをを〇ん 家持
円 うて〜きこ人のまきて〜家袖の恋こまちゑばまく人あらを 大伴て
円 秋らのゆみぶ袖とうぶれて入ゆ 袖ハまてどさまずに 人
円 世の中ハまことをこよハゆぶ〜〜色ゆ〜 袖ハあそねをんだ 円
後 きのふまでちよと袖ら〜恋ふとぶをのらちふこぶれ色きぶ 右大ト
円 今されぶねゆり今の袖して書ごひすれる秀のうあ 関院左
拾 いふせん思ひ果とつみとびねくこをとゑゑてるぶふかえで 後人
後拾 袖ゑてこの世ふ又ゆせるをおりぶそこしてみもやられん 俊方
円 おりひきゑ秋のふれの袖きふ家ふひとるねんとへ 國章

忍恋
文
老人

円 ゑれむあさ家を行ふひ首をものぶ袖のしづくを 秀能
円 みとせまで恋れハ美のゆちりてをゑぞ秋のゆちりる 慈後
円 ちぶれ吹くく萩の表を小波のるる秋のひざをを 為命△
代 ちるあさハものつ〇をそあぶさちつ表きを社思流れ 宗尚
後 ゑひ出て中さ袖ハ人〜れぬんの国れるるを
後拾 ちぶぶそをよるれ表とゑひ出てられ
円 袖そんとられさ〜ゑ恋てれ
新 れこのつきを伊ふ歌ゑんやぶゑれよりあをバををり
後 めれまふふるゑうれふあぶさちつさるねゆぞ恋ゑる
千 ゑるるの金れあまを恋をゑ君ふゑてびるれぬるふ 長能
新 ゑのをれ恋ま恋ふふ引人れきゆをバ恋ふとあるれ 忠家
新 ゑゑ恋ぶさをひゑゑ〇ど恋きハるれてあるねゑきよ 昭清△
代 ゑぶびゑゑ恋きこ袖ハ世れ中ふかゆぞゆをゑるれせゑり 完教
千 れれずとをゑをきゑ恋れ色袖とふハゑぶさ清〇ど 舞塵△

旅衣

今の時

千 世世に又逢まとき恋しさ忘れかねつる
万 家の妻に妹がよまうん茅まくら旅ゆくるぶしびと衣
円 暗らの宮のまくる我をとゝもずと妹が袖つゝ見るん
円 ゆくゝと家まつ君ハ石川の貝ふまずとてをといえずゝ
円 荒野こゝよせくる波に枕ふまきこれこんとゝれる苦まし
円 ひまざるひなれわら姓ふ君深山てもひつゝあれいろ新
古 ゆくそ見れ泊きうひぐとぞ思ひこしとハうぎりの門出世ろ
後拾 何かハヒハいそん紅ゝハまつぐさ人てあくなりかけて
千 待らんとゝ思ひいふいそぐまふ深ゝ紅ゝ衣ふまふゝ
円 いづくこの宮路とゝぞ生ぐ〇まつゝそれん宿のり
円 紅ゝとゝ思ひつゝそゝ紅ゝ衣をまゝらん
代 ヒとんといひそふ〜君ゝれで寝ときゝど牧ぞまゝる
万 石づゝていゝれの池ゝ紅ゝ衣ふ〜ん
古 つひゝりゝとゝ思ひてゝ〜どきのゝゝとゝ思ぞゝ〜と

赤位山
上宮太子
人まろ
日妻
丹比真人
ゝゝみ人
淑美
家云
駅馬
宋 紫式部
愛生
後人
大伴宿禰
蟹子

円 数くふれとゝ思ひ恋ねゝ恋ゝ〜べの手ゝみと衣とハみよ
円 寿ゝとぐふきゝぞゝゝゝ思ひよりも多き家ふ〇ん君ぞ恋ゝき
後 ゝゝてだゝ我分れゝとゝ思ひきゝゝん年ゝ花をみゝとゝも
続 為ゝ命ゝとふハあゝず君ふまゝみぞゝとゝふぞ恋ゝゝる
円 とゝぐゝ山岩ふ紅のゝえゝゝゝゝゝゝゝゝれとゝゝん
後拾 秋ゝすゝゝ契ゝゝを思ゝれずゝこひん波の見ぞゆゝき
円 紅人ゝふきふ誘ふ今ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
金 つゝゆの分ゝ清ゝゝて恋ゝゝゝゝゝゝゝゝ
円 笑のゝふ門出ゝゝゝゝゝ新ゝゝゝゝゝゝゝゝ
物 かゝゝんとゝゝる命ハゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
千 岩ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
円 結ゝふ誘ゝて秋の月ひとゝふゝゝゝゝゝゝゝ
円 秋ゝゝゝゝれ数の出ゝ秀ゝ強ゝゝゝゝゝゝゝゝ
円 長ゝゝゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

系図ふのこと
ゝゝみ人
い世
よゝゆき
後人
一條院
皇后
円
よゝみ人
定れ
市後
与明院
赤位山
ゝゝゝ
芭房

蘇生

かきぬき

野　くやしくぞ後ふかんと契る事を涙といえます袖を　清正
強　さびくれ小鈴迄る岩ぬ下ぎえて日を待松のうちもそすれ　赤陵
代　いくあらん名ふかあすうと云分小ぎ名ぎ名ら種ぬ名お　忠家
同　子規ふふふひきぬ名ぞの山奉ふこの世乃しる人かせん
円　あふこの根ぬしびのあふりてでの山路でつゆるる色き　九条右
同　君のふも高名ふるぎきぬぞぬ山ちくれどふふ家紅をみよ　宮内卿
六　ぬぞの山禁をみてゆゆ一つ　公衡
後　しぬぬふこどるぬとこえるくんうきよのかふかるふを寄人　宗尊
強　ぬぞ乃山こゆぎまをもかえず既ふさきぶふ名ぬしもぎ　寄人
古　君まさぬ姫ふえず地ぶ海のうきびくもみえるるぬ　円
後　基ぬよの美ぬ円ふ一ぬひきぬ君あま君をりてみんとハ　つ継生
円　君みぬで稀ぬりさかぬ色ふくて美既ぬてふれざり色　大政
円　かきんの新ぶふふえね海ふぬのをふ浦を海ぶ　後人
　　ハ世

問　君ぶいふ一かやいぶれぬ名ふ名ぬ一ふれ君とみるぬ色ふき　清正
風抜　ひとふ社あれ鈴底鈴ふれを名ふ君ハまふて名ふふ　赤陵
問　結ぬふふ名ぶぬ一人ふ我ふふ名ふ君ふハひとふ月やすぬふん　忠家
ヲ　ぬふひふ名ふ裏ふとえぬふ君ふれぶぬふ列ふハ名ふふふふ　大宮右大臣
野　かきんの沈ぬぶふ名ふふれぶかふぬ里ふふ名ふふふふ　芝選ハ
物　清滝やせぶの名波ふを山人ふ河ふふの代ぬ分ふ一ぬ　ふふ。
問　ふふふふこれぶ肯の沈ふぶふ紅みふふぬぶとまふふさぬ名ふ　九条右
代　鈴ふふ名ふ波ふふの君ぬぶの門ふ出ぶふきふれ　宮内卿女
六　君まさぬ岩ふる岩ぬ板まふふ月ふふふふ紅ハぬれ　ふみ人
第　きふふ波きふふ名ぬを変ぬふ紅とまきぬ名ぬ名ふ　人まろ
問　妹ふ名ハふふふふれん姫名ふふ小松ぶふれふ苦ぬすふふ　河辺宮人
問　鈴波ぶふ波ふふ名ぬふ沈みふふ妹ぶふをみまふ苦ふふ　問
六　世ぬ中ふふきふふびぶふふ分ぬを名ぶぶ海きふ名ふ海ふふ名ふ　後人
千　行ふふぬふふきぬをひふいぶふ川ぬふぬふふとふぶふふふふ　紀貫

取見

六 いかにして織ようちかふ為入みうきこれしませぬ家分ごしふ　後人
方 ゐる家の世ごれ秋ひぎおちりそれ者ご取見ふうてちぬべん　同
同 ちりぞてうわちそふハのなどりあのをれ妹ご取見とぞ　同
同 まくさるゐのう世ふをあをどりみぢ第のをれ妹ごかこと　人まろ
後 詠び来ちこみのまごるあるるせば何ふ思ふの第をつまし　兼忠母乳母
枝 り来の思ふ第ふ思ふあるとて寄れるみいちうんとぞうふ　元輔
野 ちずきみのうなきゐとみしるを世取見ふかるるふも　土御門右女
同 寄をてふとハうこの蘇衣あごふ神ふく荒ゐな　秀能
動 わうてうき義ふそてうつうるんぞ取みせる　出羽弁
同 袖ごふとすれうこみをとぞゐ垂て濡れこゆ世樹のまぞなき　生俊
六 岩見ひろむしいちゐ山むをこふるとごゐ取見とふうん　夏子
代 ふううしゐふ垂ふ垂れしけ分ちうのまれる取見せうう　清進女
古 ことゐうぞふとの第さいゐ法ゐくん長濡のうぎ塔ふ家と　友弘
チ ちしを垂をこのうれふるうびふとうまれゐきぞ取うき　右大ト

形見の書

続うこと以下同　大石主
衣　愛敬
鶴　ゐ垂
牡丹　市野
菖蒲　宝方妻
撫子　世俊
同　元春の妻
ゐこの文
いせ
同
小野宮大政
金象
木綿四手
家持

同 ふれうゐ世ふうき家ちうこのをを引し秋のうこみとぞ見ふ
同 このかふくうこのうれふるうびふ取みしうぞのあきぞ取ゐ生
野 うれとゐるこのハをとぞあぐまれ濡れてとまる取見世ふる
動 あきゐのこのうつうすうぐきのうきすやられず神ぞぬれる
代 みて取神ぞぬをゐるあきゐのうこみとのぶあぐきれあと
同 ちうまハうぞうふん世垂てをとうこみふゐしのごとハ
同 ふるうふ波のこをあうれゐ垂とぞ垂ふるあうぶきふまう
枝 あきゐのうこみとぞふあうまハうこみて神のぬるせふて
六 ちうまうびまうこ取見れみとうぞふ第ふ衣ハ接てあきふん
後 なく考ふそひて波ハのぶうゐ
枝 きくれゐてあく知るうちハあうこづのあどうをゐ面とふるうむ
野 取見とうこうれば歌のふうふ第あるゐ井これ面ひあるうん
同 あやゐ第詠ちのぶとうふ垂て筆がうちの家ときえうふ
方 秋きいぶうふうちはぶと煙ふ種ゐ第のあぶいこ嘆ゐるかも

菊
櫛
鏡
名
遺像
かゝみ絵
ともしび

續 とをひとへ君にいでゝ白ぎくはひとりおくれてうつろふらん　兼忠△
代 行へなきむかしの櫛のはこにのみ忘れてぞぬる　忠良
新 契りこしみちのべにます鏡影にかさなるうつる年　同
金 かゞみ見る契りの下にて行ずしく忘れね名にみるぞ恋しき　はやまえ
六 うせにきと身にこそしゆれさりとも名を忘らせぬ君にぞありける　光之
風 後拾 いにしへは櫛とかゝん古井にてあり次くなる月の光を　出羽弁
後 こゝろをはしめかげのこゝろきは人のあとおもひて恋しねらん　いせ
同 ゆく人は見てかへるわれにはいとゞ後ぞつらきせざりける　ちかみ
同 世の中は恋しきことは泣きてのゆにおちて白露ぞ後ありける　当文
同 きくにごゝろあるらん人はよをめにみし袖ぞおもひぬらん　清正
拾 忘すより以みへなるにあらねばこそてにいれこそのみあり　定文
同 あのつゆはよなきことと思ひて君も数とやなぞかきれ　兼賢妻
同 かゝきせにおのか身をもなし数て後のところこそえつゝすれ　能光
風 拾 ちぎりしかおもしろの恋しきはよひきをそさみしれちやみせし　隆国

能く
紫く

同 出しさいでゝひに何ともかゝりしおもほしれる君にまかせて　出羽弁
新勅 それもほと忘れねばなりし袖を何かもしく月ぞみゆらん　堀川右
同 契りさとなるひとしひと筋なき語る跡はいとまるべきかな　大弐
千 それは跡ともゝるべきにはあらずどもかくてぞ恋しき　長秋
新 秋かぜき稲葉にいかゞ忘るゝ分らのあくに見えずしきよの萱　大輔
同 みし夢をわすれ侍えあられて秋の月見えしにぞ恋しき　内大臣
同 おもかげの袖にかゝりにはべるなみだこそ涼しけん秋の夕露　大弐
同 恋をする露と人には信せよとぞ後のそらきこゆ見にゆ　ちかみ人
同 燃こえて焼く人ことに炎がまれ跡の都をば詫びてぞかるらん　宗保
同 あはれ跡のあるかはの身にそへてこそは人の恋しかるらめ　弘り△
代 うきよとのしは思ひし人よりも先にこそかん見ぬこそこゝろ　四条太后宮
同 忘へられさすがに身をただ植ゑてぞ人の後でとぞ恋しき　忠良
同 身をとゝめ古き見ぞとぞ思ふ世の中にさしねすはさぞやみゆまし　行国△
新 涙あるきこゝろの袖の夢は内へおどろきてぞと数へられ　俊成

形　ゑ〜ゑふやぐてまぎれぬ家分こそとゐる今日し先祖それ　摂政
金　その美をとゞ歌やまきるとそおどろきでて思ふるふ　邑房
用　世〜さしてをゝ〜のまゝあゞをもくて人ふとゐれまゝやハ　元任
代　とゞぶ〜〜んの内公みぬ人へ歌ゐゐゐもゐずやゐゐん　形大納言
用　あき人を考ぎかくふゐゐどゐかくく思ゞかどお恨そ　一条
用　立より衣ぶぬれて袖ふきこゐの春のようゞれふ　永孫
古　藤衣ゐゐ春ハゐび人の涙れ色のとゞあぬる　出雲
後　墨染のきゐてうすけよゐる袖ハ年〇て袖ゞ雪ゐゐる　山辺
撰　君あくてゐゐ紅葉ハ藤衣ゐゐ〜ゐゐ容ふ　新出
後拾　うすゐ〜衣ゐ色ハゐんどて〜涙のゐるそゞふ　義朱
用　ゐんとふ歌ゐとゐ〜ふ歌ふハゞゞやゐゐ〜ひゐゐそゞで　一条院
用　藤衣ゐゐ袖の年よゐみ強ておゐぬかどゐゐゐふき　元輔
金　年木まそゐひゐゐ元ゐゐゐふれさゐ藤の衣きゐ雪ゐ　形学
千　恨ゐて二年ゐ〜ふゐ藤衣涙ゐゐ〇ゐる　真憲

用　ふゞ〜ゐく清て〜藤衣きゐる日数のあさくよゐゐれ　久我内大
用　墨涙の色ハゞきゐゐゐぬとぬれぬや考ゞ衣ゐゐん　後範
用　袖人ゐ色さく墨をよゐふみて袖〜ゐゐハ拭袖のそゞ　長方
用　ゐゐくよゐあき墨涙の袖ゐれ拭かゞ伝を取ゐふゐきん　経親
代　藤衣ゐき涙恨ふゐゐまゐゐ涙の色ぬゞゐれき　益輔
用　ゐゐむぬく人きゐゐゐゐんおゞゞふ紙ハぬれゐゐ　さゐみ
用　みゐゐゐゐゐ墨涙ゐ衣ふハ立ゐふゐゐ袖ゐ色ゐき　通房室
用　ひゐゐゞふきゐる袖ハゐゐ藤衣ゐゐぬる秋を忘ゐゐゐ年　重頼
用　ぬきゐゐる袖ハゐゐき墨涙ゐ色とおゐまゐゐゐば　形中納言
古　色ゐ懸ハゐゐゐゐゐ魅ゐゐ涙ゐ紅葉ゐ　後近
後拾　藤ゐき雪降ゐる色ゞ此ハ袖ゐの袖ゐゐゐゐゐ色　出命
用　ゐゐず社色ゐゐれ色ゞ心ゐゐゐ衣ゐ　小侍従命婦
刻　ゐゐ〇袖ゐ色ゐゐゐゐゐゐゐゐゐ　圓融院
形　ゐゐゐばゐき世のゐゐゐ世ゞゐゐ色ゐ　後朱女

墓

手 こゝろなきのくはみをおかされどなきかげをみゆるをかしこかりけり　教孝

後 おもひきや虫のねしげきあさぢふに君はみすてゝゆくべしとは　よみ人

代 行く先至てゆくしかべの紀家を神にうちすてゝ渡せなり　西行

同 荒かくみらの里に君は至てんて君にいまぞしぐるゝ　倫子

箋 ふすまちをひきこの君に妹を至て山路はゆくぞいかなる　人ま呂

同 其国の鏡は山の宏とぞくれゆくしまてどきこゆきね　手持女王

同 宏とゞる手力もがれこよまれどとおりおれべすべのしらなく　同

同 大君のむつごまあへやと国のかゞみの山は其をとさゞる　同

後拾 紀路にこそ妹山ありといふなれ　よみ人

同 忘れぬるそのみしきは暁べにすそ文墓にさとられぬるかな　紅徽

手 恋しさもねはもとなくてこそやみぬしこゝはいづくとぞ見えまさん　教俊

同 年経へて苔ぞしのぶのみさきにつもれるくさの里　長実

新 多くは山しのぶるこそ恋しかれ独や苔のしたに朽なん　家花

同 まれまくる秋の下に空しきは朽ぬば跳ずや苔のしたにゆかん　俊家

無常哥

経初七日

三七日

同 おくれゐてみるぞ恋しきうれさとうきは身の泣と袖みなん　土御門内大臣

同 さらぬだに露けきさがの野べにきて昔の跡にしほれぬるかな　俊忠

同 そこらくと忘ひつゝなてきそうれぞと床のなくて袖へぬれなり　従家

同 浅ぢ原かるかく恋しき草は山の露を数見と忘ひをるに　周防

同 としさぞうきこ世のさがは野べにこそ露は消れて泣としけれ　後京女

同 哀しみつゝおもひつゞけてこれがあまるかなすぎにしこと　赤人

同 いかにへのさきゞいのこはつまどひとかなひとそのわするゝまでこれ　よみ人

手 世べこれぞ昔は我や泣かんその世しらぬ苔のしたなれ　資行

拾 かるらね命やさらにのびねんとふのなうら恋するまでぞ　兼輔

新 恋わ至てとやと忘ふ秋山の道かの空に松むしのなく　後京

代 うきのべは蓮のうへぞ哀れなるはよはこそのすゞろとぞぞ　六条

同 かゝの葉は髪はうざしにさしそへて命もまた人はちよへて　聖徳太子

新 ふかし日へいくらいにちらねとて昔は人とすみそめき　夕霧

後 くるゝらん月日もしらず歎くまに哀れはうしとなりぬる　道房

四十九日
七年
いそのは

拾 秋風のよもの山よりおのがじゝふくに散ぬる紅葉かなしな　すけみ

代 七とせの秋のこよひは徒にひとりしみれば月ぞうらめし　土御門院

古 紅葉さへ春におくれし君にあれは村にぞなる　貫之

後 ありしかどいぞ見おもえず恋しきことの限なければ　時望

拾 藤衣はらへてすつる涙川岸にもまさる水ぞながるる　よみ人

後拾 限あれば今日ぬぎすてつ藤衣はてなき物は涙なりけり　道信

同 なき人は音づれもせで琴の緒をたちし月日ぞかへりきにける　道綱

同 こぞのけふなかりしものをいかでかくなどてうきにも我身なるらん　後朱雀院

同 なかりしと見し月日はめぐりきてそのいきてゆかぬ人ぞ恋しき　伊勢大輔

同 思ひ出るみに涙し墨染の衣にさへしかねなりけれ　棟仲

同 墓なかる歎きにこぼる藤衣そは涙になかしつるかな　元輔女

同 我身にも恋しきことのつきせばやきのふのこゝろにてとおもへながらなりて　江侍従

同 としへてとびかくるめる村鳥のふるすに待つかな覚へきかな　義孝

同 こぞよりも色こそまされ秋萩は涙の露のかゝる秋にぞ　前中納言

無常

同 きてなれし衣の袖もかわかぬに別し秋になりにけるかな　義孝

同 年へてなれける人に別にしこぞはことしのけふにぞありける　時文

千 限あれば人もろくでかなしとは涙せでならにとめてしかれ　崇徳院

同 恋しさにそへても袖のぬれきはなかりしのちの別なりけり　小式命婦

勅 ちる花はまたもや恋の時さへ涙しこそとまらざりけれ　二条宮

同 あだなりき人へきこのよとぞ思へとてなにかはそでぞいへるにひかし　内大臣

同 おくれじと歎きならにまだぬなさきだつれきよの名のみせなら　信家

代 みそぎして衣ぬぎとこそ思ひしか涙をさへもながしつるかな　俊成

同 おくれじとおもひしかひもなかりけれどなほこそ人の数見せ遣　恵慶

同 人のよをはかなきものと思ひしかどさぞのちをひかふこゝろにだに　為家

続 きしまりぬぐそ恋しき君がこゝろ涙し衣のなどいふぞ　定家

万 世の中はむなしき物と知時しいよゝますますかなしかりけり　大伴

古 よの中は何か常なるあすか川きのふの淵ぞけふは瀬になる　よみ人

後 世の中といひつるものかかげろふのあるかなきかのほどにぞありける　同

後
義ちうたいでうぐるくのもうあきうふうねる分うんで　ちみ人
拾　物ちうかとかいつあり　ちひうん人でて悲ハさこをみるし先　為伝
同　うきこ世ばでもむそでうつてそ者きあんあすとそとハれば　分ら　保胤
後拾　とへかいくらてあしぐ為ひ分をちぐしそのえあやうるし　旅人
詞　いづる息入を結ますうるに世をうらひ初うん紙ハいうふぞ　野宴
千　ひよをだ中の子小門四て物とあしんタべをぞまつ　良選
新　うれねまの分をばうそで人の世ひ長たるぞうハえうれき　紫式ブ
同　ちひ四そ中ひ見る人てあしあうむそ宮うたよ　りまる
同　ほの立ひうぐしふうてしあうねうか旅きあしひよふこそ　花山院
同　世ひ中ハそそうてそおうぐと者そうやうそ分ぐまだ　懐九
同　あるハあくなきハ数そふ世ひ中小長いづをの日まで歌うを　小町
同　年月というぐ家分小ちうそうんきのふひ人そうふハるひ世小　あり
同　ほくくとちんぐうれしいつをうう人の長をそそ小ひぐき　左大ト
同　ちうまこ首うるひ小ぐふ世ば家分と数小入ねぐきうれ　行ま

同　かくしつうぐのをとなしせむ長うそれ紙うのぐん　同仏
同　あぐうくんとしちうね為ひ分のさすふきえんうぐこそ　ちみ人
同　為の分ひきえば家こそさひぐうあちくれん地う森ひ小第　小馬命婦
同　いつ数きいうちうぐきことあれぐ後の世しぐ人のすうん　あり
同　皆人のちうぐ小かてしうねふうしずちねるうしひ見とハ　道命
同　きのくうしく人いうふしちぐうそ世ひ為小ぐ見ふる　同
同　よりぎこふいつう為ぎ為の分ハそふの久為あすの便　同
同　うれしいつぐあうまうしうぐとみしく人を思ぐとすきびいとぐ　同
勅　為ぐふようの数のうちぐひ人ひちちやいとぐそうう年　同
同　ちうあくしあすの命ひうの者うれ時ぐちうしうちうら花　赤盛
六　すくうくとみしくひしあくれるふいつうんとぐ家くうあき　ちみ人
同　ちちあき世ひきくひの後こそ秋のとうるふちせうちうる世　い世
代　時のいくるれ小しうねしを為うつとめてぐえようくる見ぐき　大系秋祥
同　ちうれきこを我分ひとうとふ人うあうぐうくてすを人ハあうれいぐ　國信

寄雨無常

月催無常

月前無常

寄風無常

寄露無常

詞 紅あかく麻のもとゝ萩がえの末葉の為れるこの世や　堀金
新 ゐなせ此為ふあらそふまでは分らいづまとすらん　法性院
円 末の為りの名やせの中にあくんさきごろ有る黄　通昭
円 淋茅ふかるあくきゝ茅のこれ為をくみとこひうるこゝ　周防
円 風ゝくみ萩の葉でふ亜為のあくんさきごろ移のゐ有さ　具平
物 儀ぢ系世るきふあくる為よりて移るゝくきゝ分をいふせん　右衛
円 紅色に黄ふ若くる為に分ハのどふ拙をゐくきゝを　信西
六 とゝ為くてきゆる移ゐ為の分に茅葉ふかくとゐえふくるれ　いせ
円 ゐづこの葉葉ふかくるゐ為のとゝ歳よへん家前ゐれくす　ゐみ人
新 あゞふ亜茅葉に為の清ぬるとゝ長よそふやゝ人のゐるゐん　釈迦
代 茅に二の為とたせくぬ時ゞふてこゝこれまもゝまゞゐに代ゐ　和泉式部
円 若ハさて長ハ若とゐねもゝ余ハ為とゐくふゝそゐる　行基
円 せくゝ世の茅葉ふやゝるゐ為の歳よゐゝゝき拙ゐゐれくふ　い世
円 きえゝそん為のうきみのゝきゝどころいづまの世ゝ四茅葉ゐる　大弥

朝観無常
夕観無常
善悪衰観無常
高水無常

代 とゝゐくいひゝふ世ゝゐ為に代ゐゐのやゝゐ代ふぬるれ　国歌院
円 ゐる代世いゝゐゐゐるまに代ふむ代ゝる為の風まつゝゝと　若狭
後拾 あゐとゝそゝ牧世ゝゝゝゐる拙ハ移歳に代れ　いつゐ
代 移ゐゝけゝゝとゐゝゐゝゐゝゐゝ独ゝゝゝゝのゝハ歳ゐゐ　しょふ
円 ゐゝそゝむゐゝきゝゐふゐ茅れゝゝゐれゝゝゐれゝゝゐゝゐ　あり
新 ゐゝれハ拙ゝ移ゝき清の者ゝゐあすゝゝゝゝゝ分ゝゐゝゐゝ　和泉式部
後拾 世ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ　全
新 ゐゐまゝゝゝ人ゝ歳ゝゝれゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ　堀川右
代 あすゐゐゐ世の中ゐゐ移ゐゐれゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ　素言
円 ゐゐ茅ゝゐゐ茅ゝの余代ゐゐまゐゐれゐゐゐゐゐゐゐゐ　事宗
円 きゝとゐゐ人ゐゐゐ移ゐ世の中ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ　元秋
千 あまゝゝびゐゐゐゐゐの里ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ　和泉式部
新 ゐ世川ゐゐる舟人移ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ　東三条院
円 り人のそすゝゐゐゐる山の舟代ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ　芳太政
　 ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ　光秋

寄火無常　　慈仁
老後無常　　雅康
夢中無常　　清輔
寄夢無常　　智海
　　伝愛
　　大納言
　　友則
　　貫之
　　宗尊
　　色葉
　　雅家
　　俊成

寄室無常　　慈山法
無常念仏　　貫之
諸行無常　　色葉
　　上東門院
　　祝部
　　慈円
　　俊業
　　小町
　　清重
　　定家
　　俊業女
　　清輔
　　家言

觀無常

代 世ハ中ハうくこそもなけれうくとてもどうの者も世ゝ
用 者のうれ世のくもりだにあらせじ行ふよをて長しとも
詞 佳人の前ゝをかの月をいつをよそふきうんとすゝん
用 しかも落まゝもるゝこゝろとまらぬんいづ世の世ゝつひに栖ぞ
形 つくゝと思ひ知いつをり人の長をとゝふせぐき
用 あきくを思ぶるよいつをそゝの長をあすの我分を
強 つれもすゝ人ゝむかしとゝひなだ行ふ氏よのさらあるゝぶき
用 あるハあくなきを数そゝ世の中ハ長ゝつをゆうんとすゝん
用 いづをこれのいづゆゆのふすとゝ世ぞ我ゝ烟とあゝんとすゝ
動 これよぶハ月まつちどいふをきる長いゝ雲ハまどゝん
チ きどろこてさそゝやあだいぶせん孫光であゝね命せる
用 生ぶるをみるハ数こそ我ゝ光れもれるゝぶさこれよるゝ
用 この世ハも浦ぐき程や生きぬゝん世の者あず地れゝれゝき
形 うきをもづこゝんよハさそゝいるふをとゝひそゝうゝ長ゝる

生光
宮殿△
佳昭△
駅光
左大ト
古納云
赤海
小大夫
大弥流
弦伊ヶ
西位△
宣旨
芝伝
摂政

源觀無常

曇常觀身

離無常 煙

代 長ハ世ハ苦嘆てハちゝね秋の月をもていう雲ねあるう世ハ中
用 いつをとゝ世どゝふ地をもてゝん河のまどゝふゝゝゝね命ハ
用 世ハ中をすてぬ分せとゝひせだ者あきゝをゝ我ゝゝまゝ
六 世の中ハいづゝゝ我分ハもてあゝ長とゝいゝんあるうとゝいゝん
強 よの中ハくこそゝゝれつくくとゝ思どゝう我ハ者ゝ世ゝ
用 ハとゝゝゝ中ハすゝあゝどゝいゝあゝゝふゝゝゝんとすゝん
強推 世ハゝる烟ハつをゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ人のくゝ年
金 いふせんうきこ世の中ハすみゝゝまのゝゝゝ烟とゝぬゝき分を
用 空あきをよとうきをゝ長ゝある我ゝ者ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
形 みゝ人の烟ハ者ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
動 ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
強 ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
用 ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
代 ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

大輔
左馬
宮内△
長人
如覚△
右馬
りゝ
笑佐 信イ
紫式ア
修立△
強奉
懐奏△
修結

雲　看　泡　藻　橘　紫　花

現身守額雜根草

柳

落葉

琴

鐘

舟

書

過去帳

歌

出

塵

板

世の中を何のがれんと思ひつゝ舟の泊りぞ定めなき

いふせん月を深舟のふなをかりみつひのとまりやいづくなるらん

ふせ川をうる舟人のゆくすゑもいかなれば世の中

後拾遺 世をかぎりてうらやましきかな

みしかくも世をすぐすかな

代 ながれて命をれし法ぬとも

初 ちぢのあくひまゆく路をみてし牧長ひつゝ

後拾遺 定頼の歌 ながめつゝ人をこがれしわが身

代 あすをしらぬ身にさ分とは

古 風吹上のあはうの色ぬぬ萩の分かれ

同 世の中いづくをさいそなるんゆきとまるをぞ君と見む

後拾遺 旅の宿の秋とものりなば雲のりかへてうらやましき

千 色もなきこの世の中とかねきむいづくを旅のんちころすん

清聲△

增賀△

前太政

紫式部

り遠△

後鑒△

和泉

うみく

古今集

梅園大納

うみ人

同

花山院

光法△

同

旅の世をまこと旅のて業枕草の中ゆく業をそるるれ

同 かくして旅をとまんよりぞこの宿りるを業まくれ

後拾 わたぐもの枕しかをかりあぐ宿りんむのゆりとそ業のとこそ

同 いろあくしを旅のとをふれいづくよりるの君と社きけ

同 色ちりぬるこの世の中にあるぐらいづくて旅のこころをすん

後撰 ちぢちう海ぐすちうみよをかいてぬまるすづちおんん秋

野 宮柱ちるの宮のかをきこそ高よりるれ日のみげ多

同 神ぐもみりすそ川のそのみかを宮らをの業ぐで宮

同 業ちそくを宮川のゆるぐらあぐき代までくけそこのはん

代 神代山ゆ姫こうまみ波せぐすきまかをきちぢのうそぎ

同 人くこの瓦の宮しを義よ(ねみとすそ川のちぎりうそぎ

初 異所のをそれ新とゆうかを君をちとせのうぐいす

同 ゆうぐいすのうきの長人をせかれせね梯をぞとる

後撰 変ゆうすぐそ初うん宮ゆ神のんぐみりうぐや

敏宿觀無常

伊勢

齊宮

岩清水

後拾△

新古△

野境

同

かをにおる宮

補和

あり△

拾政

色家

紀之△

後拾

巡禮

笛補

賀古

增生△

加茂

住吉

代 男山さらでぐしてとまりしおぶろ月よの新でとすれぬ　亀氏
同 哀えぬ山ゐるの長ぬきこれそ墓世まぢかつくゑきこれ　橘尹
同 宗しらぐしたつのおうびこ君かで神けんよせる　とゑ人
同 たれでおそ人のぐしたゑ橘恋をゆのとゆは牙ゆぐろとそ　唐笹
同 山ゐるの神ちりて嶽ちるのをゆのさらとんぐしらん　伊宗
野 鏡ゆくぐゑくしのゑたゑ西かうる牛のとゑ神也　[redacted]
代 法人のうをたゑ神かま海せだけで黄田かぬ牙もすれ　茅ゐ
同 ゆうんをうす鑿のうえせうびゑくしゑ川のとろ炭和　大補
同 神世ちいかぬてみゆまりうえかゆくひをぐしそゆうん　後宋
同 をみ衰みうし川かぬえて豆ゆくひかゆゑのよと　後源大寺
同 豆海りかの川ゆみよをゆてみしやゆきたゆ平ゆん　上東門院
同 恋ゑきゑ橘山吹ぐしきえ神のゆぐこかうゑうゑ　俊信
撰 たりるちうひと神のゆひをを豆ぐ久しゆ住吉のまつ　ゆ法ハ
後拾 住吉の神い衰とゆうんむゆきゆきしてきこうんぐ　後二条院

同 紅てたえしくゆぬゆ住吉たまづこみせゆん　赤俊
同 住よしの松さえる柚ゆしぐゆ住吉のうえうの吉ゆ　定如
同 ちきうぐ吹ゆうしゆか住吉の松のしづえをゆうしゆ法　経任
初 住吉のゆみかひうれる松ちうしゆ神の宗ぐなうしれゆる　笑業
子 ゆうこしてうたかゆうる神ゆんぐ住ゆかゆをくゆきゆ也ちう　内大ト
同 神ちうたゆ也ちうその浦ゆ宝ゆ神ゆうん年の恨しぐゆ　俊秀
野 いう神ちうゆ神ぐゆ住ゆたゆの松ぐこうびいちひうちうねる　[redacted]
同 むゆまりと君ちうしゆ法ちうゆ住ゆたゆの久しきゆせうち祝ひ初てき　亀直
代 西の海やあたきゆ系の波まうち歌れ出しゆ住ちうの神　芝清
同 炭ぐしうこうきうて家国ゆ嶽世ゆねうん住吉の神　近房
同 住吉ゆちうゆ一うび逢ゆをぐゆまりうひをみゆきゆ也ゆ　伊房
同 いゆくいうゆの出章ゆゆるゆうゆや天ぐうぐうん住吉の神　経平
同 ゆまりとうるみゆきいえゆせゆ長ゆうれ住吉の神　俊成
同 ゆきうをみよ出ゆくゆ住吉の松ゆやこいゆひすうん

春日社

大原野

布留

後拾
代 なくまつる三笠の山に神ませばあめしたかぜさえぬ　範俊
金 三笠山神の斎代いちじるくふるとけぢめ嫌しき　安光
新 春日社を新宮くるゆゑ　吳伸
代 たのもしく神代ますなる三笠山ふるかんなぎ人はいのるか　小弁
同 天ぢくこえくるべまみよとこそ神とみるきのしたよりあ　恒方
新 春日まつる神のたくなびく波もぞ小浜ゆさかの川なび　太政
代 八重桜と題ふたかてこそ春日社世ぶかはとるなるあ　経宣
同 春日社なる三笠山ちよをてこそ春日山峰とる雲をしてこそ　出房
同 きさらぎの初さるかたやまの春日山峰とる雲をしてこそ　信牧
古 大和やまとちの山ふるこそ八神よりそこひ出るあ　業平
新 春日山神のもるを松のかぜ嵐をたくる花をそ　道命
代 ふるさと社の級の紅葉きこゆしと春雨のくれ　道直
同 春日そふるの社といかるはいろ和世ふるあまくぶらくん　重物
同 春日世のつかもちふるの社と人やいひなる　経家

日吉宮

三輪

今宮

稲荷

玉津島

気比社

蚶方神

斤岡社

貴舟

後拾
代 ゆくすえ日吉社出神ぞくこちらの社ある事代やをん　憲政
拾 神きくるひえの社ゆくすえ家ぞ家ぞ家ぞさく　定国
新 ちはやふるひえの社ゆくすえ家ぞ家ぞさく　道命
代 みぬさとる三輪のもりふるとをもりとるるいみ（の社　盛方
後拾 白妙の雪をみてぞ白雪　也能
同 とよのはあしぐるひまし海すか新の社ふかやもろもろ
同 稲荷山みつの玉垣うちくるき春神ぞ社ふこそ　亜槐
千 いまのしも京代松の年ぞそこのみやしろ神さびわたる　忠慶
六 ちはやぶる波ふる立き雪るひわらぐ春ふるそよ玉ぼ多姫　六条入道
代 山ぶかきるつるきを雪ふる神ぞ社ふるものの古宮　り道
同 ちふかます雪ふる姫ふとをとろん義よふかねさかりこの神　経国
同 さかをとと社ぞくるゆくすきこそ序宮の神とふ　政平
続 くく国とくをとりをとれてこのまるをれ　ちみ人
後拾 ちふるを川ふふかるてさふ〇ちくをとてこすせをふ　財房

祇園　知恭
朝熊　祝園
産宮　越前
蟻通　雲祝
駿河富士宮　黄色
松尾　暴風
國常立尊　黄泉
月読尊　飛鳥
鶴鷗草葺不合尊　飛鳥
天児屋根尊　素盞
豐田歳

代　宮まらたぎち　あぐる　宮川　月　八神の　月　とそみる
後拾　みなる　姫神の　その　なる　姫小松　ちはや　代　ごさ　でも　なり
代　神さびて　長歳よ　小　ぬる　ん　浜　小　あ　る　ひさ　ま　れ　宮
月　読人　とり　ち　ひ　ち　ひ　と　ろ　ち　み　の　宮　と　八　祝　ば　ら　れ　く　り
六　ち　ち　と　あ　や　り　ち　ね　大　宮　小　ち　と　り　せ　ば　ち　ぶ　知　ど　さ
初　み　な　姫　神　ち　の　月　た　え　ぬ　ま　ま　ま　て　て　川　や　ま　ぶ　ち　り
後拾　ち　ま　や　ぶ　る　松　の　と　と　た　紀　ら　れ　ま　ま　て　て　川　や　ま　ぶ　ち　り
初　た　た　下　と　さ　む　る　姫　宮　す　び　宮　て　宮　代　ま　ぞ　小　緑　ぬ　ん　ち　り
代　あ　く　ひ　の　浜　の　き　ご　と　と　ち　ず　た　つ　日　ば　ぎ　の　姫　と　宮　だ
子　月　み　の　神　と　と　ば　た　ぎ　の　ち　る　浜　世　た　ん　ご　ち　ま　姫　宮　だ
初　月　と　の　あ　ら　ふ　れ　ば　ら　で　せ　た　あ　く　ば　ら　き　世　ば　ち　る　ぞ　の　き　ィ　世　公　為　色
代　と　ま　づ　の　浜　き　ら　て　紀　れ　し　ま　ら　た　こ　と　歳　ら　ぬ　ん　和　泉
初　紀　あ　く　て　る　日　の　宮　ま　す　と　小　た　ら　の　み　と　い　ち　ら　ら　れ　宮　伊　色
新　久　と　の　あ　の　や　一　宮　ち　ら　て　ち　ち　宮　ん　ぞ　ぬ　ん　微　宮

下照姫　当時
玉依姫　現存
社　太人
社頭　太上皇
社頭月　り　宝
社頭夕　左大
社頭秋　太上
社頭榊　後人
社頭新　同
初　う　な　下　姫　ひ　の　宮　ま　ぬ　稼　た　宮　治
野　な　ひ　る　ひ　ま　の　い　と　姫　る　て　ず　秋　は　る　ふ　た　ま　ち　宮　正
後拾　て　た　下　ず　む　神　の　み　そ　れ　ど　ば　ち　ま　ふ　ぞ　ち　ち　の　宮　長
野　宮　ふ　む　す　宮　て　み　熊　姫　の　ち　ひ　ち　の　宮　ま　ち　の　廣　宮　長
代　み　す　振　神　ち　ひ　の　し　ひ　宮　の　の　ま　と　の　ふ　れ　ま　ち　ん　宮
同　き　宮　て　こ　わ　く　ち　ま　ぬ　宮　き　彩　の　と　ま　ぬ　や　月　の　宮　あ　ち　ん
野　み　ま　ま　神　の　ら　ふ　を　清　て　ち　の　宮　ま　い　ど　ん　月　ま　げ
同　み　ま　ま　る　ち　ひ　の　宮　た　あ　や　板　八　神　の　み　そ　ま　ふ　く　そ　ま　ち　り
去　神　塩　の　み　む　ち　の　ち　の　榊　宮　た　板　八　神　の　ま　ま　ふ　蔵　ち　ぬ　ひ　ふ　ま　ま
代　神　代　ち　い　ま　ひ　初　て　宮　ち　り　の　ち　の　榊　宮　い　ち　ま　ち　ま　ま　ま
同　さ　ま　宮　の　宮　と　め　れ　ば　み　ま　姫　神　の　い　ま　き　ま　さ　て　き　ふ　ち　ら
野　君　代　彩　る　ち　の　宮　を　人　と　ま　ま　で　す　の　宮　た　あ　る　の　む　ま　き
同　宮　日　姫　の　ち　ど　ち　の　宮　た　姫　ち　ま　く　ま　ふ　神　の　宮　野　姫
同　神　風　や　ま　ち　の　ち　ち　ま　ち　ま　ち　ま

祈雨

祈晴

社頭述懐

社頭夜

社頭久

社頭祝

社頭祝居

神祇

春神祇

冬神祇

寄日神祇

寄月神祇

寄花神祇

寄柳神祇

寄注連神祇

寄鏡神祇

[illegible]

[illegible]

[illegible]

祝言

寿天祝

寿日祝

月前祝
寄月祝
寄雲祝
寄雨祝
寄風祝
春祝

金
今日もまくとさろ代なる和日ホと君ぞつくん第代をつ
円 君ぞ世へ今日もてのつ〇三笠山ろ〇ホ和日のさろん恨も
月 きみが世をたのぐらいどる日のてろん恨へつきでとぞ
代 星れきみゝの光へ加ゝこを必る和日しのどる世々ん
円 君ぞ世ぞ光ゝるぐき南〇さす世日の光ホ出ん恨も
万 ゆぐろるとそ代を春きた大とを小國さえんと月へ世ゝ
物 家者の光成こそ代きを代さの月をぞいのる代どろ南れとハ
円 光よりと三笠代ろの月ぐの光さゝそゝ人をのゝさホ
代 君ぞ世を光ホゝをそゝ代ろこの天世月とぐ成そゝ人
結 きみぐよの南ぐの山代ろ世ホとのどろを代いる時ぞる
後 白光のゝゝるろゝぞ春南つるホろ光を月とハ南る
結 吹風ホをそのゝみち家南られぞ君ぐとの新ぞのどき
万 いぐゝるゝろゝぞ代ゝのさろゝぐのゝえ必る春ホ南ろる
後 おゝする海の春こを吹ホろを世ちゝ松風や春ホゝろん

やゝろう
恵留
大宮大政
金氏
遠仲
ろゝ人
万異日
周防
ゝろを
能宣
後人
好古
志貴皇子
ろゝ人

夏祝
秋祝
冬祝

結
物 きのゝゝをちぐぞ石と世の春代船ハろゝホぞ春ろる
円 ろゝ時の浦代まさぐのつるまぐ春のおぐらハえゝろん
六 おゝゝて世へ春南ゝゝ吹風ゝ枝をおゝさぬ春柳の糸
代 のどろれるゝ代ゝホ代ゝホ春ヒ年ゝろ万世ぐさ春ホわんと
万 ろゝ落を春さろぐき春ゝ南ゝ代ゝ代ゝ代

寄歳祝

寄地祝

寄山祝

寄道祝

寄道祝言

寄水祝

代 神世よりものいでのうごきれさかゆるしいをやしろ　清補
同 衣まの衣まさらてもものあるゆの山い君ぐまかく　同
同 うごきあまを君ぐみよれまぐねうきびの中山ときうきだ　西政
同 をうれそ世すり月日のゆうく君代あうぐいやるれ山　孫光
同 君ぐ代へもるの浜れさぐれるの宝稼の山とあそつるまで　牧翁
同 まさぐより宝ほとあるちとせ山こや君ぐ世のこりあらん　ちよ人
野 大ゆ山こえていく世の末とかみをせ世ゆしあひかるゆ　能基
代 君すりぐよする世りをみぐき世ちよ俗をうれ浦ぐ　家俊
万 ゆら名れちき中川ハ絶ぬとし君ゆうんことつきあやれ　國人
古 きみぐ世ゆあうさうの宝ゆあうぐれうとゆいるゆ　丈本
拾 いづこ川のどうきあれ君みぐ世べと年ハ新ぐすみまうて　邑盛
後拾 君ぐをえつきうとぐ世ゆ神ぐ世やみくすを川のすまん浪ゆ　孫伝
金 きみぐよへとみのゆ川のあ池てよ世代ゆとて孫じとぐ君　邑重
同 万世へまぐ世るぐ宝ゆうきこ流れぐ世ゆとをうて　六条右

寄海祝

野 君ぐ世ハ久しうるへうるうもやゆ天ゆ新の川乃あれ孫世ぐ　邑盛
同 ときうあるゆ松井のあ河孫ぐをれしぐぐゆぐ世ハ元えうる　安愛
月 うもうさへつうみりあへず池あるのいひ世ぐきまうぐうれぐて　源川
云 神ゆあみのゆのこれるゆ宝ゆあういもひそぐうゆ世ゆ代のうゆ　ちよ人
同 吹ゆ世りゆあず宝ぐそゆ白波の野ゆぐ君ぐ年をよ世ゆる　安之
代 神ゆ乃やみゆすを川の浦き世ゆ君ぐ世ゆうぐぐうを　三条入道
同 大井川ちよゆ一ぐ世すをゆハゆうのみゆきゆゆあひゆるゆ　邑盛
同 路あうぐゆうぬを川ぐきをうれぐをよ世ゆ君ぐうゆ　孝貞
同 家君ゆのあれをうきゆよ世川浪しづゆるゆ世ゆうをつて　源俊盛政
同 君ぐ世へゆよりてゆゆう宝ゆあうぐゆ世ゆまうゆ世てせうん　光雅
古 きみぐ代をうゆをちとゆの始ゆをうて歌すまんうぐれ川ゆう　ちよ人
代 うをうづゆの浜れまぐ代うぐうて君ぐちとゆの毛数ゆ世ん　安愛
月 みづぐ拾ひうぐぐち舟ゆうきゆ世ゆうをうゆとまう浜ゆうれひゆ　孫盛
君ぐ世へるゆゆるとの浦ぐ世ゆ世ゆ世ゆ名ゆ世ゆの数ゆ世ゆうを世ず　孫盛

寄巌祝

寄郡祝

寄國祝

寄郡祝

山家祝言

寄竹祝

寄松祝

万葉

人しれぬ命をたのみ世の常のとこ岩の岩ねをかこつらん　金村

格　君が世をかぎりもしらぬ巌のごとくいはねの松のいはねあるらん　元補

同　うぐきすの声のかぎりの君が世をとこ岩の松のあるかぎりまで　同

同　きみが代をたれか数まん白雪のつもりてあまるとしのかずまで　人麿

同　山ぞこの川のせきよりとこ世まで神のみゆきの大宮ぞ　同

同　うしろ見ていにしへみの川乃三瀬ずつくまつらん大宮ぞ　人麿

古　みの国せきの藤川絶ずつくまつらん万世までの

野　岩角や大和まつり神せよ君がゐるとやうこめ亜久

代　よろづ代の神の定めし国なれど古くよりしとぞさうえん　人麿

同　君がよい光つきせぬ日月かな神ろ巻の数ましまず

六　きみがゐる命ひかずそれより踏てふ新よ世をうるなり　小大進

代　豪君かつくまつらん苦むせる岩の村代万代までの　ふる

後　君がゐる神ぞうる岩ぞかちてこそれるもちそすれ　笑要

拾　白雪と方くせどそよ代をかぜとかうくぞうぐ　清正

愛之

万葉

我君のちよろ川井のうとかみさまり東のたるあるかな　元補

六　御ゐるとおもく極る君かれだちとせいかの松とそいみ吊　愛之

拾　ゐ神の山代岩の小松を極てとにくきがいのそつるれ　蓮実

後拾　君日山岩の小松を極てとにくきがいのそつるれ　能因

同　万よ小ふ代の宝ものてゐ沙ふ小ふ能のたるあるかのみどりう　貴業

同　一とせの松の下ぞ松りきてぐるれよ世とみつまだ　蓮性

同　君がよを何小ことんとにつるる松のみどりてよ代を祝れ　人麿

金　いく春ち見咲ねん絶ぬの松り神代の松とこそきけ　小うり

子　君が世ふらぐいぐ松ふのまつのと数いすくあるとうり　孝義

野　絶の見ふいそふ松の枝ごと小君がちとせの数をこもれる　後国

物　きみが代のちとせの松の源ぐるとさうぐねあ小新いみえつ　東能

同　ふとせまぐ見やまさうん君がごあいにしをあつる松のみどりとハ　弱冠

同　枝をそする君日代系の姫小松いのるれと神ぞ　家方

六　ふとせるまつといとせ極てうるかんぞうぐてちぐうる　以世

寄椿祝

寄杉祝

寄苔祝

寄雀祝

六 たのかのうえんる森とれのまもちとせふとてあるずでを
代 万代とのべふとうし松すれぞよせのみざのことふてそさ
同 君ぞ世のいろんえあのとれ君のの松ふ若おくるまで
同 と命ちぐきこむ沒のそ命れ松ぐ久しまて君ぞ為とを
秋 とやうるそのとこのむ樫葉とべふとて葉とうしぐ
後撰 きみぐよ石むは樫やちとを伊ふそくんぐを命ゑを
秋 やちとこんぞるとやむ樫葉ぐとすぐき初いさこめ
千 和れださうえこそませ君ぞ世ふあく板ふの宴の板まう
同 とたうるみとのふの板材や八百万代のふ中あるん
代 大びえやとびえの板しさうえあうとたわるさぐの木法せとこ
六 義君ハちよ少やちよふさぐん君の君ちと為そこうのむすを
秋 とたうる松ふうれる若おまぐ年のとまたちるぐとぐふ
後撰 給のえふ漢のまさぐの若ちて君ふとあんん松とこえ愛
拾 六度ふむを為るべのさうあぐうふて人ふ君ぐかふ

い世
貫子同
小弼
うう
邑屋
貫業
後法性寺
永範
季経
為義
ふみ人
同
え補
い世

切 ふとれのむぐとふふすぐるのちとせハ君ぐみよの数ふう
同 つるの伝松ぐさきこふえあぐるちと世のこれをみする世ふを
同 よ年ふる松ぐさきこふハむれるてたぐさこのそぐんあるう
金 君ぐ世ハいく万代ふかさねぐきふるねぎ川のたるれふぐふて
初 松為の波ふむれるあうぐのちのぐさまくみえよ代れ
秋 むり石ふ世まるるうぐのふそ若君をひふちうぐとぐ
六 よ世まそのゆをふしあるを松れのうぐひうぐの君ぐちゆ
同 みえをる漢のまさぐやあうぐのちよをそる数とすふん
同 むれそるふのうぐそ君ぐこあ我ふうくぐをうぐせ
同 あうふるうこふ仕若そぐハちよをみよをくん為ぐ
同 つるれ君くよをそを為ふるうぐの村る君ふこそちのぐをひをまふぐふれ
強 松のをふす君を為ぐハ君ぐ世れちよをとるこねる中せふを
代 あうぐのをふあうぐ君ぐよのちと世の数ふうぐくをてん

を人
為義
元補
を弼
すけ
を命
愛を
ゆる
をみ人
ほし給き
い世
愛を
同
永弼
法性寺入道

寄亀祝　同防
久祝君　貴之
高君行世　同
寄世祝　惟方
寄氏祝　元輔
　　赤染
　　公四
　　元眞
　　武子内
　　清人
　　重祐
　　貞敦
　　仁徳帝

代よ世ゝぎき君井ふき君る鶴のまれすぐ毛姫る公長ぞこれ
同　ちとせゝと歌きてゝあぐふぐふ萬てゝの鳥ゝてゝる鶴ある毛世ゝ
六　沼まゝう出くる亀ハ万代とゝぐふゝてゝの毛ゝぐせゝう
代　ゝゝゝゝゝゝゝゝる毛きみゝとこそ神ゝ三笠の山ゝぐつゝる
続　年ごふ彩ゝゝれぐふりゝれそめゝゝぐゝきこちゝとこそ
詞　御賀代ふ小名抜て彩つる神の世ゝゝ久ゝゝゝゝん
初　みかゝのいでゝゝ万世のゝゝゝゝゝ
代　君代彩ゝゝゝゝゝゝゝゝこそゝさまれる世ハゝみゝきを
拾　難波ぐこゝぐゝゝゝゝハ君ぐ世ふゝゝゝゝぎゝせゝ
野　ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
六　いゝぐゝゝゝ世ふゝ世のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
代　ゝゝ神ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
彩　苗代のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
同　ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

祝両人　同
寄鏡祝　ナ
寄別祝　寄
寄社祝　六
　　後拾
　　同
　　詞
　　拾
　　物
　　代
　　同
　　同
　　拾

寄神祝

ナ
寄ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
六　ゝゝ振ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
　　ゝゝ彩ゝ松ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
　　君ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
　　ゝ

寄神祇祝

離祝　沙

笛

金　君が代とは千代のみをとも祝ぞるめ　千代とは
同　こがねの大きるぐさ君が代を五世神々見ぬるとも
詞　絶えのいろ人神の久しさ松に載ひおもしろそるとも
同　君が世は代々にるぐさこそ神に極るんは代より代
代　ひいもかる春日の春代を極れまづ君の為とも
同　神ぞやいすず川みそぎ為しそい業代の君をまもらん
同　君の世は千代に代まを世そるいとひぬとは神の出給ふ
士　さみだれは限りてもぐ出る涙のまさごの数はよみつくすを
拍　世々との数とうたんの人の涙のまさごの数
子　君が世の数は千代限りなさの代浦のまさごの
新　やちよ千代涙のまさごの代君の数は千代とかんもろ為
同　さみだれの年の数をだに数の涙の為
六　塩竈の浦の波の数とそ数えつるかる
拍　ひとそ来るねもそ来るきこ花外の来ぬよもくもあらん拍とは

笠懸
為世
祝儀
長房
為直
ちの人
沖の石
ちの人
仁安二
清子
山世
要之
中皇女命
能宣
ちの人
紀友
ちの人
小野

琴
柿頭
脇息
碁
舟
草
柳
新

子　君のひれ君世まもと時そ千代小
六　ぎき兵の社代ちぐとりをへせだと小君代ちと世とそ為る
同　ちよ千代君ぞさ小ふを世を君ぞ代ぞ
後　代ぞうそくをちさこてまさこ君代小新の嵩をんしづ小
同　斧代の杉ん代ちぐ君ぞ世代つきん浪ハ打ぞ
拍　ぐるくとをあびさそり舟の約束をくちゆるる
六　秋とを小りふ舟をみるを小ちる出を君代ちと世とぞ
万　君ぞ世代象ちもらん君代の君代ぞ千代いさ結びそる
拍　ちいやぶる三上の山代柳葉を業をまさる君ぞ世をそ
同　君とのを色ちぐるね柳葉ハみそのこ小ちる世ぞ
初　そのトくきみの中小ハ三笠代の柳をぞさす
代　みそこ山君の小ちる柳どの新ぐいせすを万ぐん
後　山人のこ為る新ハ君ぞ為ちと代のとをつまんとぞ
同　年の数つまんとすあるちのハいとこつ兵こ為ちをくん

右の歌は君ぞ
愛之
ちの人
仁安二
清子
山世
要之
中皇女命
能宣
ちの人
紀友
ちの人
小野

詞　板その面おかつるゝをみて作るよの板をてふれ　歌枕
千　玉北のきこゆゝ知ぬみをあれどを田の村乃稲をこそつく　花色
同　ちはやぶる神田の里の稲うれど月日とをかゝりしるべし　定房
新　あふうのやさくこの稲ばうろこ形をみよの初ふそつく　信実
後拾　杵ゆせねあつの稲のいしばえしきこゆのみえしするれ　色紙
金　星をあきこ雲のいらふをはるる秋日の里は光さしそゝ　教定
代　玉はあるる秋日の里は光さしそゝ世のさう迷よ光そゝる　こゝみ人
拾　光ゝ色やこゝの中山松ゝそ紙ちゝさねよ世のあみゝ　同
金　いつとあく風ふく光ふ豆ちゝの数りをゝんぬ光ゝよふ　肥後
続　星ゝ世の色井ゝ浦よゝるゝひは拾ふ秋さこゝしゝゝ　金葉
同　数をゝぬ玉北の系ゝいあゝんん新ゝよゝるゝをさまれるよゝ　要集
続　よゝのまふ星河ゝ行ゝゝ玉つ玉ゝまゝ取ゝゝしゝゝゝ　金葉
よゝ　ゝゝゝゝの河光ゝをゝゝ為ゝ秋ゝ伝むゝゝ玉ゝ数ゝ　女房
後　星ゝゝゝ玉のはゝ長ゝきゝてゝ玉ゝゝせゝゝあをゝゝゝゝ　惠子

塵歴

千　うれ玉さを玉ゝゝつ星ゝき雲の後のせゝゝそゝふ　雅経
同　後ゝさ波をゝの袖をゝつゝむふ豆ゝゝぬるあゝのゝ夜　雲集
拾　うゝゝさを首ハ袖ゝはゝみゝゝゝゝゝ秋ハ分ゝゝゝまゝぬふ　とゝ人
久　雲のゝふふちゝゝあゝれどせみのハ秋ゝのゝ社いゝ雲ゝれ　津守経
同　ゝ年ゝものふひくゝゝまゆのゝ長ちゝをゝゝゝ後初ゝる　同
拾　ゝゝゝゝのゝゝゝ枝をゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　元輔
同　ちゝゝゝ数ハ光ゝす世の年ふ涙ゝき分と人ゝいゝく　ちゝゝ
同　雲世ゝゝゝゝん地ハきの国ゝちゝゝの後ゝまゝゝゝゝ　元輔
同　ゝゝれのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　後人
同　ちゝゝゝれ年北の系ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　元輔
同　ゝゝの苔ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　同
同　二葉ゝゝ数ゝゝゝふゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　経宣
後拾　苔ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　房
同　ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　赤染

孫祝

七夜

後拾 ちはやぶるまがこの山のこのもとをさきをよせしとあづる神のせゞを　藤三位

金 いつの年神ゝ長と三笠山三葉の松乃よせのゝきを　周防

同 ちゝぐれかつそるとみそゝ祝しあくこゝうみ梅ふ春ふるふる　ちゝみ人

詞 めづらしく久しき初るつるのまハよせのむつきさそなぐさ　大輔

同 ちよぶさき武代日新そ神山の峯より初るめぐみせゝる　通釈

同 紀日さすそ手かの山代姫小松ゝつやちとせの二日うるゝん　忠峯

代 ふせぶさきを井ゆくそる鶴のまれすぐちゝびるも長ぞこを　周防

後拾 ゝぐの祝代ゆゝども祝ふやうるのまれちよをぶい社やれ　保昌

拾 ゝ年おもの松ハかぬふ春ふゝ祝ちのかゝびゝをひこそやれ　道雲

同 むぐゝんやら基世をゝそゝれぐうゝくゝそ七日世ゝる　ちゝの

後拾 ちづらゝま光さゝそゝ蓋ハもちあぐゝ社ちゝゝわづゝ光　紫式ブ

同 ふ世武祝ゝんの神代のすゝしきハ緑せぬ家の風ふそゝゝる　赤染

同 いゝゝ春ゝ長の祝ハせゞ生ゝゝふのりとびあぐゝてゝん　ゞ任

同 姫ゝ松大ゝゝゝ山の祝ゝんむぢちとせゝゝゝふまゝ世ゝ武ゝ　元輔

代 ゝそむる二葉の松ゝり末ハう神ゝ生ふ祝りもきれ　後二条ゝ

月 歳ちとせ君ゝこすゝ武ゝゝゝれぐゝゝゝ松の数ゝちゝれず　藤全一

後拾 ゝとせゝる二葉の松ゝゝゝゝ社蔭のゝゝゝゝ武日ゝゝゝゝゝ　右大臣

続 いゝふゝゝゝゝゝゝゝゝやゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　入道ゝ

拾 ゝのゝゝ武ゝ松ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　右大ト

同 ゝゝゝゝゝふゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　好古

後拾 ゝ長の浦ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　元輔

新 大ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　紀忠

後 大ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　貫之

拾 ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　ちの

同 久ゝゝの月の樹ゝ松ゝ平象のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　紫式ブ

同 ゝ紫ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　元輔

後拾 ゝ武ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

詞 松高ゝ枝ゝ世ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　元輔

元服

ゆゝう 九十日

をきゝ

年賀

四十

五十

六十

七十

古 家をうひ君ぐ〻ちよふ名をそへてとぐあ色てだ宮もぐおせよ　をみ人
後 百年と行くをとれをちあぐら宮ぐ〻ぐあへわぐずぐ宮ろる　同
み うぐぐ〻る人あらせぐ奥の宮の松とや年ぐつまぐ〻　法性寺
古 梅若ちとうひらん老らくのらんといふする宮まぐ〻らり　業平
同 宮世ぐまつふぐ宮ぐいまひるる年の恋ふ伯んとぐぐ　宮世い
ム 万代ぐ〻よそとせ世〻そそ〻れぐ恋ふひる〻き君ぐみを〻れ　西園
古 いぐぐ〻よ宮る月日ハ宮〻れど宮ぐ〻ぐすぐ君ぐすぐあき　奥風
後 よとせぐん宮ぐいまさびすぐぐぐのをものをこそうろ安〻れ　元輔
古 鶴ぐ〻ふいちとせ代後ハちぐ〻ふくふわぬ伯るまちせそぐん　後春
自 ゆろ人のをろこびきますぐ六十ぐびをこやのみらのあ〻をとぐ　野栄
同 六十をぐ伯よろこびとぐふぐんちよ〻をぬ宮き君とこそ〻れ　愛宮
古 ひぐ〻ぐとあ〻ぐ〻ふあ〻ぐ君ぐちよふあ〻よ〻ぐ　仁和山歌
後 七十ふころの後松老ぬれどみよの孫ぐい松ぐ〻ぐ〻ぐき　清輔
自 ゆろ人のいぐ〻をのそ〻るわぐ老来ふ君の後伯ちぐる　家仲

八十

九十

杖

同 君ぐよろひいの宮をひてり来ぐ〻ぐ松七十の長伯まきせん　定保
同 七十ふみちぬる年を伯つ〻ちとせつ宮ぐま身よそひせち　孫昭ム
後 ぐ〻ぐふれぐ八十の長ふ君ふ君を宮ぐ〻ぐ　為仲
自 きみぐ〻ぐん八十九長伯ろ〻きて松ぐ〻ぐあ伯ぐ〻ぐ　孫正
同 八十ぐ〻ぐ伯ぐ〻ぐ〻ぐ〻

尾後祝

治國載松

雜天象

寄天象雜

雜地儀

雜動物

寄風雜

雜夕

寄山雜

寄水雜

寄橋雜

寄海雜

寄川雜

寄木雜

寄苔雜

寄衣雜

寄枕雜

寄舟雜

寄玉雜

古 老ぬとそ[illegible]ぞ我分をせもぎ[illegible]老ずハ[illegible]ま地ら
自 [illegible]川せ[illegible]ぬ[illegible]の[illegible]ハ[illegible]
初 [illegible]る松の[illegible]
野 大[illegible]の年[illegible]ぬ月日[illegible]
後拾 [illegible]の日[illegible]の[illegible]
代 [illegible]
後拾 [illegible]
千 [illegible]
後拾 [illegible]
新 [illegible]
後 大井[illegible]
拾 [illegible]
古 [illegible]
後拾 [illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

寄鐘雜
雜色
雜聲
雜香
寄花雜

野　蕾ぬらして咲くてをねらへ入れのるもとつくとて　和泉式部
後拾遺　世の中ふかきそこの笑ひかなるとしらぬ花ぞふくかぜ　同
拾遺　ふるさとの小家の松ばかりそなぐ北の山の高き色やまさるん　傷州
六　笑そむる花をねぬ月新のうつる若のしら巣の系　仲さ[illegible]
代　中ふかをいくらそぐ笑まさる月と花とかそめしかを　西園寺通
続　しらいとぐ花ど松風は吾ぐうぐらうぐらを　定教
六　春ならぬ秋ハ鶯の鳴ぬ花ものぐ書くぐ長也言ふ　黄之
古　限ある春ぐぐ山ふとれ花ハ世しるるね抽ふぐ色ふ　久人
六　ぐぐ[illegible]ちさく抽ものの花の枝をやつぐ花ぬ出く　黄之
同　巣ハ木ト咲ぐれり秋風ふ吹る抽ひの系　みな
野　四月ものををふぐりめぐる花ぐ世のちらぬ色ふ　傷州

怜野集巻之十二

事ぬ[illegible]ます

[illegible]ぬく[illegible]かよ
事ぬ[illegible]けて[illegible]よむ[illegible]とは[illegible]たらい[illegible]と久[illegible]こうき
[illegible]ぬく巣集[illegible]せ[illegible]ぬ[illegible]ひの[illegible]ふ[illegible]わさて
[illegible]人の巣に[illegible]ぬ[illegible]さよハ[illegible]わ[illegible]を合
[illegible]といふ事[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ハ
[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ

てゆきてとけぬるをもてあそぶ人影のよ
ほうとうれいなるをよむ面をあらためて
あんなるまにたるをそもそもとの学の影後世
ときうるはをぶめぬせなくりまて古にいうむく
ゆくれとをあるていうをそてうきに一乃ゆ
ほあるはいうをそといんにうるへ人のことひ
をうの詞もをくらめあることをくてよろしの
ことわさすてみやひのうれいうるもあきくをのに
けて当るのいふへうねいなるかれをあるふれと
とあひてよみいるこをやをの法るくさてうけ

てよまんるはれるをありぬへまとの学をを人のを
めいひさとひて古まこたるにつきのみ多くれいうし
よまんとるるこ八先よるしあををひのあるをあ
らむはよほうさ乳ぶをかくよろつのことを和
きをいうへとをこになり来ぬれいをよこ入る
へき事ハ心しよくををひうあんををふ
にあくくていなかくられをみくあるとうな
さはいをうをあるへまさるハをは之の閑もの
よたををこによくいをん事をかくまのたをてう
けるる影のようなんハあるやはをてれをうるへ

かれいとよりよの人の影詠めこそかくれる事となり
ぬるをおもひつゝけるいきほひにまんありけるこの
おもむきをふかく思ふにこの影論といふものは
あてはめこのわさもかくといふくくとにあるべき
言葉にしてきりぐ不可思議たとへひき
すると古城志ふ人とをもてをのれひとりよい此
きりとるようにしてはいられの道をうかゝまん
志ゝ体をくちかしき人めもれい古をとゝ不可思
ふへをれ影論を信れあるべかるなれいまるひかる
くいとひてあるうたにこひるまんとかるいふ事

れたるをくみしてはいとわりをれしてそうにめを
をうていふるれいとしうけうしてをうは原
雄風めしはをのたまあるをまをとは月をあさ
けを花をもてあそびてせめこと義のをゝ城も
者ををけみしまるめあるをわれるかくうけ
くをひとのおのの人をみをひとんまをのれくに影
詠をようくせん事はをくに論しはへまことをれ
とをれをのの人のたをとなりてをまあるふめる
明題影来のくをひくれるまおほのれとみをいの
ををわれほゆる影をもしををををををををををを影めを

六月ばかりあつさむしあるはけてをうぬへうれとあ方
里に出くるれる事もみゆるハんほうの後物めうろ
得るうんんをうくうてうひてふうはへうれハ事
をもしかれるひまなしのゆをそうさけうりにる
うつれるをうとをたもハすにはなれゆうをよみいて
むをもおめをうあしさまるあうちんふいはは
うれいうて影をもう秋を一わるおううひてをの
せをとおもうをいうとの事わのおもをを
ろなれハうろとりうてをのりいるたひく
あわし秋ものうをうをうひなうぬとをえる

をみはるを先を影をふるくいをあうちをハすんて
おをさを後ものをはをすをるもおはし又影ろ
文字ををを回れ夢よかるをのををんのをハ
さるもおをうれハいをうあうあたるをなり方ハ
をををうを影をつまををうはハをうれををあぬ
方はかの古今六帖の例をうひて題をあるをて
歌ををまううをなりてなりの色載つおはるれ方の
をうひをを方はふるをハ方回毎をはうををする
うけあるたうひををり後あるををうをうをなら
うをりてりやりうるはくをうひをぬをいをあるハ

まひまれひろ人をあつめぬすむるにはなれきめ式
らろ人ちあ家ーしさそい（とおれをわるそのこ
ひうまそ百の移にしておにはやろもまたくまを
ゆくの方人れそひおる集よものうちなるとの
ことりて古ろ人れひろひそせ家集うち閑ち
式たるひよそにたるにちいてるうれきい
まめなるひよわれうそたはまとはえせしとお
えるそこ百かにたはにまつはをめて芳宣園の
百のふるくさにるひ学百ひんふまて
れ義よりておそろ伎師になるくるわしまて

けるつまーーー

[illegible]

西木千幹

書肆

京都三條通升屋町　出雲寺文次郎

同　寺町通松原下ル　勝村治右衛門

大坂心齋橋通北久太郎町　河内屋喜兵衛

同　安堂寺町　秋田屋太右衛門

江戸日本橋通壹丁目　須原屋茂兵衛

同　本町通横山町壹丁目　出雲寺萬次郎

同　芝神明前　岡田屋嘉七